

矢部川流域下水道事業関係埋蔵文化財調査報告 1

彼岸田遺跡 I

福岡県筑後市島田所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書

第 2 6 3 集

2 0 1 8

福岡県教育委員会

矢部川流域下水道事業関係埋文化財調査報告 1

彼岸田遺跡 I

福岡県筑後市島田所在遺跡の調査



(1) 彼岸田遺跡全景（北上空から）



(2) 彼岸田遺跡全景（西上空から）



(1) 調査区全景（真上から）



(2) 2号溝出土呪符木簡（左：表面、右：裏面）

序

本書は、福岡県南部の筑後市において計画されました矢部川流域下水道事業の終末処理場建設に伴い発掘調査を行いました彼岸田遺跡の調査報告書であり、同事業関係埋蔵文化財調査報告書の第1冊目にあたります。発掘調査は、平成12年度に行いましたが、諸般の事情によりこの度報告書の刊行に至りました。

彼岸田遺跡は、14世紀中頃から15世紀代にかけて存続し、内部施設を二重の堀で囲んだ防衛的色彩が強い遺跡です。それらの溝からは、舶載陶磁器・漆器椀・下駄・銅製品・茶臼・石硯・呪符木簡及び唐鋤・馬鍬などの農工具が出土しており、遺跡の構造及び出土品から室町時代に水田荘の支配に関わった大鳥氏・関連氏族の居館跡と推測され、当地の中世史を研究する上で多くの成果を得ることができました。

本書が、筑後地域における埋蔵文化財及び歴史についての認識と理解を深めるとともに学術研究の一助になれば幸いに存じます。

なお、発掘調査及び整理・報告書作成にあたり、多大なる御協力を頂いた地元の方々をはじめとして、関係機関・関係各位に深く感謝します。

平成30年3月31日

九州歴史資料館

館長 杉光 誠

例　　言

1. 本書は、矢部川流域下水道事業に係る終末処理場建設に伴い、平成12年度に福岡県教育委員会が発掘調査を実施した彼岸田遺跡の調査報告書であり、矢部川流域下水道事業関係埋蔵文化財調査報告書の第1冊にあたる。
2. 発掘調査は、平成12年度に福岡県教育庁総務部文化財保護課（南筑後教育事務所）が、福岡県建築都市部下水道課（八女士木事務所）より執行委任を受けて実施したものである。
3. 遺構実測は、田辺げん・福山美樹・小田が行った。
4. 本書掲載の写真は、遺構を小田が撮影し、遺物は北岡伸一の撮影による。
5. 空中写真は、(有)空中写真企画に委託した。
6. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、總て九州歴史資料館で保管している。
7. 掘図で使用する方位は、磁北による。
8. 遺跡分布図は、昭和43年国土地理院発行「羽犬塚」1/25,000を使用した。
9. 本書の執筆は、Vを小林啓・奈良大学大学院 安木由美が、他は小田により、編集は小田が担当した。

目 次

I 調査組織と調査経過	1
1 調査に至る経過.....	1
2 調査組織.....	2
II 遺跡の位置と環境	3
III 検出遺構.....	8
1 調査の概要.....	8
2 掘立柱建物.....	8
3 溝.....	10
4 土 坑.....	14
5 墓 窨.....	15
IV 出土遺物	16
1 土器・陶磁器.....	16
(1) 溝.....	16
(2) 土 坑.....	27
(3) 墓 窨.....	28
(4) 整地層.....	29
2 呪符木簡.....	30
3 木製品.....	31
4 金属製品.....	35
5 石製品.....	36
V 彼岸田遺跡出土木製品の樹種同定	39
VI 総 括	41
1 検出遺構.....	41
2 出土遺物.....	42
3 呪符木簡について.....	43
4 彼岸田遺跡の成立について.....	44
(1) 遺跡の時期.....	44
(2) 遺跡の構造.....	44
(3) 彼岸田遺跡の成立.....	44

図版目次

- 卷頭図版1 (1) 彼岸田遺跡全景（北上空から）
(2) 彼岸田遺跡全景（西上空から）
- 卷頭図版2 (1) 調査区全景（真上から）
(2) 2号溝出土呪符木簡（左：表面、右：裏面）

本文対象頁

図版1	(1) 彼岸田遺跡全景（西上空から）.....	8
	(2) 彼岸田遺跡全景（北上空から）.....	8
図版2	(1) 調査区全景（北上空から）.....	8
	(2) 調査区全景（真上から）.....	8
図版3	(1) 1号溝Ⅰ区南端部（北から）.....	10
	(2) 1号溝Ⅱ区土層（南から）.....	10
	(3) 1号溝Ⅲ区土層（北から）.....	10
図版4	(1) 1号溝Ⅲ区（西から）.....	10
	(2) 1号溝Ⅲ区陸橋部（北から）.....	10
	(3) 1号溝Ⅲ区陸橋部（西から）.....	10
図版5	(1) 3号溝、2号土坑（南から）.....	11
	(2) 2号溝Ⅲ区木製品出土状況	11
	(3) 2号溝Ⅲ区漆器椀出土状況	11
図版6	(1) 8号溝Ⅰ区（東から）.....	13
	(2) 8号溝Ⅱ区土器出土状況	13
	(3) 9号溝Ⅲ区土層（西から）.....	13
図版7	(1) 8号溝Ⅱ区（西から）.....	13
	(2) 8号溝Ⅱ区西端土層（東から）.....	13
	(3) 8号溝Ⅱ区東端土層（西から）.....	13
図版8	(1) 1号土坑（西から）.....	14
	(2) 1号埋甕（西から）.....	15
	(3) 1号埋甕下部土器出土状況（南から）.....	15
図版9	(1) 1号溝出土土器・陶磁器	16
	(2) 2号溝Ⅰ区出土土器・陶磁器	16
	(3) 2号溝Ⅱ区出土土器・陶磁器	19
	(4) 2号溝Ⅱ区下層出土土器①	19
図版10	(1) 2号溝Ⅱ区下層出土土器②	21
	(2) 2号溝Ⅲ区出土土器	21

図版11	(1) 2号溝IV区出土土器・陶磁器	23
	(2) 4号溝出土土器	24
	(3) 5号溝出土土器	24
	(4) 8号溝出土土器	25
	(5) 9号溝出土土器・陶磁器	26
	(6) 2号土坑出土土器	27
図版12	(1) 1号埋甕下部出土土器	28
	(2) 漆器椀	32
	(3) 木製品①	32
図版13	(1) 呪符木簡	30
	(2) 木簡部分	30
	(3) 赤外線写真	30
図版14	木製品②	32
図版15	木製品③	34
図版16	(1) 金属製品	35
	(2) 石製品	36
	(3) 五輪塔	36

挿図目次

第1図	彼岸田遺跡周辺遺分布図 (1/25,000)	5
第2図	彼岸田遺跡周辺地形図 (1/7,500)	6
第3図	彼岸田遺跡周辺農地整備図 (1/4,000)	7
第4図	1号建物実測図 (1/80)	8
第5図	2号建物実測図 (1/150)	9
第6図	1号溝隣接部1・2実測図 (1/120)	10
第7図	2号溝木製品出土状況実測図 (1/30)	11
第8図	1・2・4・5・8・9号溝土層実測図 (1/60)	12
第9図	1・2号土坑実測図 (1/80)	14
第10図	1号埋甕実測図 (1/20)	15
第11図	Ⅲ・坏分類図 (1/4)	16
第12図	1号溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	17
第13図	2号溝I区出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	18
第14図	2号溝II区出土土器・陶磁器実測図① (1/3)	19
第15図	2号溝II区出土土器・陶磁器実測図② (1/3)	20
第16図	2号溝III区出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	22
第17図	2号溝IV区出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	23

第18図	3～5号溝出土土器実測図(1/3).....	24
第19図	8号溝出土土器・陶磁器実測図(1/3).....	25
第20図	9号溝出土土器・陶磁器実測図(1/3).....	26
第21図	1・2号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3).....	27
第22図	1号埋甕下部出土土器実測図(1/6).....	28
第23図	1号埋甕実測図(1/3).....	28
第24図	杭15西半部整地層出土土器・陶磁器実測図(1/3).....	29
第25図	土師器糸切り拓影(1/3).....	29
第26図	呪符木簡実測図(1/2).....	30
第27図	木製品実測図①(1/3).....	31
第28図	木製品実測図②(1/4).....	33
第29図	金属・石製品実測図(1/2).....	35
第30図	石臼実測図(1/4).....	37
第31図	五輪塔実測図(1/4).....	37
第32図	彼岸田遺跡防護施設模式図(1/800).....	41
第33図	彼岸田遺跡周辺小字図(1/300).....	45

表 目 次

表1	彼岸田遺跡出土木製品 樹種同定結果一覧表.....	40
表2	皿・環法量表.....	42

付 図

付 図 彼岸田遺跡遺構配置図(1/300)

I 調査組織と調査経過

1 調査に至る経過

矢部川流域下水道事業は、都市環境の整備と公衆衛生の向上及び山ノ井川・花宗川・矢部川等の水質保全を目的として平成9年度から実施しており、八女市、筑後市、黒木町・立花町（現八女市）、広川町、瀬高町（現みやま市）の2市4町に跨る大規模な事業で、終末処理場となる矢部川浄化センターが筑後市大字島田に建設されることとなった。

この終末処理場建設予定地の南縁には、周知の遺跡である島田外屋敷遺跡が存在し、平成7年度に筑後市教育委員会が行った発掘調査により溝・土坑・近世墓・ピットを検出しており、SD10・15・20・30・35等の溝が終末処理場建設予定地に延伸していることが予測された。八女土木事務所との協議では、周知の遺跡が存在することから発掘調査を行う必要があること、確認調査により調査範囲を確定したい意向を伝えた。

確認調査は、平成11年6月に実施したが、小田は長野古墳群の調査を行っており、手が離せない状態にあったことから福岡県教育庁文化財保護課調査第一係加藤の協力を仰いだ。確認調査の結果、遺構が検出された大字島田501～508・517～520・703～716・720・727～730・739～743・746・749・752～755、大字彼岸田532を調査対象地（I～V区：面積約26,000m²）とし、平成12年度から本調査に着手し、関連施設の建設計画に合わせて平成18年度まで調査を継続する計画とした。その後、終末処理場の建設計画が縮小され、それに伴い本調査の期間を平成12～14年度の3ヶ年間の予定とした。

また、当該事業の主体は福岡県であるが、先の2市4町が受益者となること及び地域の文化財は地域で保護・管理・活用した方が望ましいとの観点から、平成12年11月10日・20日に受益者となる市町を対象に調査説明会を開催し、平成12年度の本調査は福岡県教育委員会（南筑後教育事務所）が担当するが、平成13年度以降は終末処理場が建設される筑後市を調査主体とし、関連市町から支援の職員を派遣して欲しい旨を伝えた。しかし、筑後市・八女市を除く4町には、文化財担当の専門職員が1名しか配置されておらず、職員の派遣は不可能であるとの回答であった。これにより、人的支援を得られない筑後市としても調査主体となることを承諾しかねると言うことになり、結果的に福岡県教育委員会が平成13年度以降も本調査を行うこととなった。

I区とした1次調査地は、筑後市大字島田字外屋敷703-1・705-1・706・708～716・720・727・728・746番地の面積にして約7,700m²であった。確認調査により3条の大溝を検出していたが、遺構密度は薄らであり、遺物も余り出土していないことから本調査は楽観視された。しかし、重機による表土剥ぎを進めるうちに、大溝は幅4m、長さ約120mにも及ぶ大規模なものであることが判明した。本調査自体は、平成12年10月2日から開始し、大溝の掘削にはスコップを用いたが、運々として進まなかつた。2号溝からは呪符木簡が出土し、また下層からは漆器楕・下駄に加え唐鏡・馬糞をはじめとする種々の木製品が出土した。発掘調査は、年が明けた3月16日で一通りの目途を付けたが、調査区全体の西半部を掘削したに留まり、東半部は次年度以降の持ち越しとなつた。

なお、調査期間中の10月15日（日）には親子遺跡発掘体験を実施し、40組80名の参加者があり、その模様はTVQ及び有明新報社により報道された。また、調査終盤の平成13年2月25日（日）には現地説明会を開催し、100名程の見学者を得ている。

2 調査組織

矢部川流域下水道事業に係る終末処理場建設に伴う埋蔵文化財の対応は、福岡県教育庁南筑後教育事務所の文化財担当者が行った。なお、報告書作成に関しては、発掘調査が完了する平成14年度を予定していたが、小田が南筑後教育事務所から九州歴史資料館に移動したこともあり、現在に至ってしまった。また、彼岸田遺跡の総ての調査次数を報告すべきであるが、小川が担当した2・3次調査分の図面・写真類及び出土品の所在が不明となっており、今回は小田が担当した1次調査のみの報告となつたのは遺憾ではあるが、記録類や出土品の所在が判明次第報告したい。

彼岸田遺跡における平成12年度の本調査及び報告書作成の関係者は、下記のとおりである。

〔本調査〕	平成12年度	〔報告書作成〕	平成29年度
福岡県土木部八女士木事務所	福岡県流域下水道事務所		
所長	大坪 千秋	所長	村上 義浩
都市施設整備課長	永田 和彦	工務課長	辻 吾一
同 第一係長	城戸 信行	同 副長	佐野 晋也
同 主任技師	吉丸 義人	同 技術主査	古田 博文
福岡県教育委員会	九州歴史資料館		
(総括) 教育長	光安 常喜	(総括) 館長	杉光 誠
文化財保護課長	柳田 康雄	副館長	飛野 博文
同 調査第一係長	佐々木隆彦	(庶務)	総務室長
(試掘) 同 技師	加藤 和歲	総務班長	中村 満喜子
(庶務) 同 管理係長	平野 義峰	主任主事	秦 健太
同 主任主事	鎮守 俊朗	(報告)	学芸調査室長
福岡県教育庁南筑後教育事務所	(整理)		
(調査) 生涯学習課技術主査 小田 和利	(分析)	保存管理班長	加藤 和歲
	(報告)	主任技師	小林 啓

〔発掘作業〕

石井 勇 井上貞夫 牛島茂雄 鶴賀久博 井上カツエ 小田広美 田辺げん
野田ツギエ 中川原みさ代 中村睦美 福山美樹 山下智恵美

〔遺物実測〕

棚町陽子 田中典子 中川陽子 中川真理子

〔製図〕

豊福弥生 江上佳子

〔写真撮影〕

北岡伸一

なお、発掘調査に関しては、八女士木事務所、筑後市教育委員会、南筑後教育事務所をはじめとする関係各位の御協力を得た。報告書作成に際しては、福岡県流域下水道事務所の御理解・御協力により本報告書の刊行に到ったことを深く感謝申し上げたい。また、末筆ではあるが、筑後市教育委員会 小林勇作・上村英士氏には種々の御教示を賜った。記して、感謝したい。

II 遺跡の位置と環境

筑後市は福岡県の南部で、日本有数の穀倉地帯である筑紫平野の南東部に位置する。市域の南縁を矢部川が西流し、有明海に注いでいる。東は八女市・広川町と、北は久留米市と、西は大本町と、南はみやま市と接する。人口約48,800人、面積41.85km²の農業生産が活発な田園都市である。

主な交通網としては、市域の中央部にJR鹿児島本線・九州新幹線が南北に走り、その右側に国道209号が並走し、八女市と大川市とを結ぶ国道442号が東西方向に走る。また、市域の南東部には、物流の大動脈である九州縦貫自動車道が南北に走り、八女I.C.が国道442号に接続する。

遺跡の位置

彼岸田遺跡1次調査地は、福岡県筑後市大字島田字外屋敷703-1・705-1・706・708~716・720・727・728・746番地に所在する。人工河川である花宗川中流域左岸の低地（標高4.2m）に立地し、筑後市教育委員会が平成7年度に発掘調査を実施した島田外屋敷遺跡と一連の遺跡である。なお、遺跡名とした小字の彼岸田は遺跡の北西部に位置し、532番地が該当する。発掘調査以前の地目は、田・畠・山であった。

地理的環境

筑後市の地形は、北部・東部の洪積台地と西部・南部の沖積低地に大別される。洪積台地は、高位・中位・低位の3段丘から成り、高位段丘上には善藏塚古墳・乗場古墳・岩戸山古墳・石人山古墳等の八女古墳群が古地する。沖積低地は扇状地性低地と三角州性低地に分けられ、市域西部の流～高江～庄島～折地～下妻以西は海拔5m以下の三角州性低地で、調査地の大字島田も含まれる。また、筑後市西部から城島町（現久留米市）・大本町・大川市・柳川市にかけては、筑後川・矢部川の後背湿地の開発に伴って掘削されたクリーク（溝渠）網が縱横無尽に存在する。

なお、筑後市西部を特徴付けるクリークの創始者は、和銅6年（713）筑後守として赴任した道君首名とされる。首名の卒伝（『続日本紀』養老2年4月条）には、「興_築陂池...以広_灌漑...肥後味生池及筑後往々陂池皆是也」と記され、古代においては耕地開発に伴い灌漑用のクリークを掘削したことが窺える。また、クリークで方形に囲まれたヶ所には多くの屋敷地名が存在し、彼岸田遺跡の近辺にも外屋敷・觀音屋敷・大屋敷・北屋敷・東屋敷・西屋敷等の地名がみられ、防衛のために居館の周間にクリークを巡らせたものと考えられる。

歴史的環境

鎌倉時代初期、南筑後地域には八女市域に上妻荘と弥勒寺領の川合莊が、広川町から筑後市北部にかけては熊野神社領の広川莊が存在していた。一方、下妻郡には筑後市水田を中心とする水田莊が、同市馬間田・下妻には下妻莊が存在し、ともに天満宮安楽寺領であった。また、旧瀬高町本郷・文広には広田莊が、三瀬郡には三瀬莊が、山門郡には徳大寺領の瀬高莊と横手莊が存在していた。中でも水田莊と広川莊は旧花宗川を挟んで、時折、土地争い・衝突を繰り返していた。

水田莊は、南嶋（本村）・北嶋・福嶋の3村から成り、福嶋村は筑後市古島～島田～井田～中牟田にかけての地域とみられることから、彼岸田遺跡は福嶋村に含まれる。ここでは、彼岸田遺跡が形成された中世の筑後市域の遺跡を中心にみていく。なお、文中の距離と方位は彼岸田遺跡を中心としたものである。

水田上町遺跡は、彼岸田遺跡の南東1.8kmに位置し、水田天満宮参道の東側に所在する。16世紀後

半～17世紀前半の井戸・溝が検出され、水田天満宮関連の遺跡と考えられる。また、水田下桜町遺跡では、井戸・鍛冶遺構が、水田上仁良菴遺跡では井戸が調査されている。榎崎遺跡は南東1.3kmに位置し、14～16世紀に使用された道路遺構が検出されている。

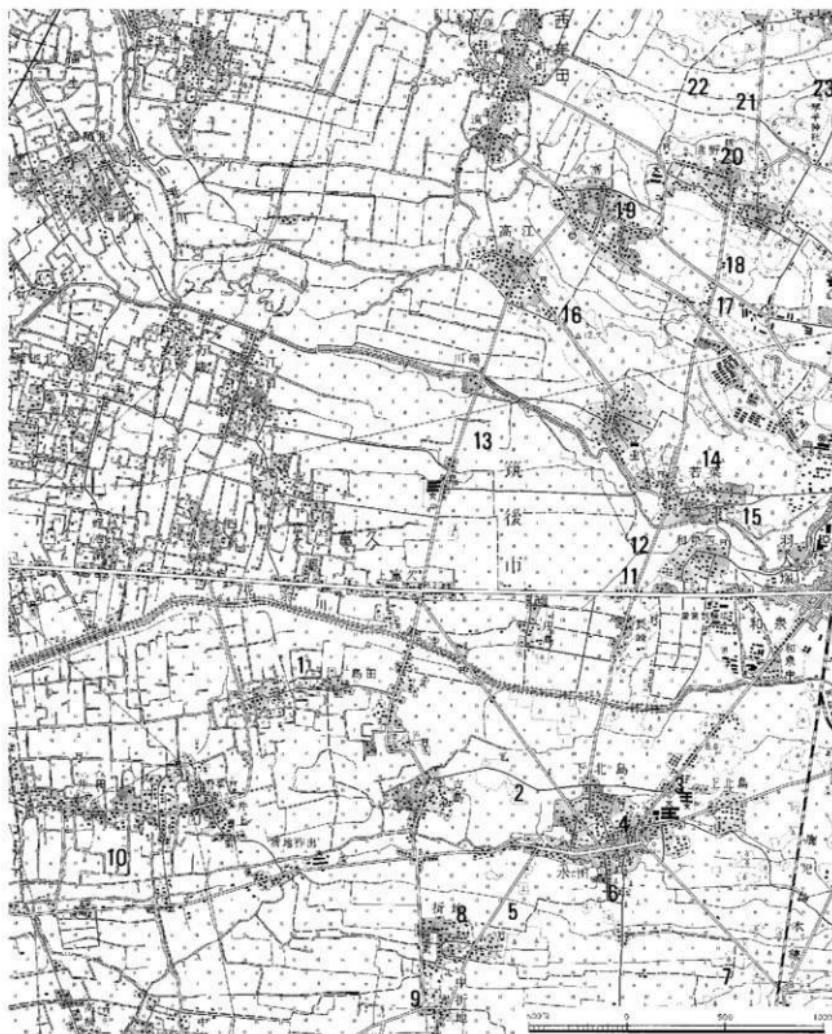
折地長間寺遺跡は南東1.5kmに位置し、区画溝・土坑・ピットが検出されている。中折地内栗遺跡は南1.8kmに位置し、15～16世紀代の掘立柱建物・区画溝・井戸・土坑が検出され、船載陶磁器類及び茶臼等が出土している。建物は梁行1間×桁行2～3間程度の小規模なもので、居館ではなく集落とみられている。井田堀越遺跡は南西1.4kmに位置し、区画溝が検出され、珍しい木製の枠が出土している。以上が、花宗川以南の中世期の主な遺跡である。

長崎坊田遺跡は、花宗川を挟んで彼岸田遺跡の北東1.8kmに位置し、16世紀代の区画溝が検出されている。若菜立薪遺跡は北東1.5kmに位置し、掘立柱建物・区画溝・土坑が検出され、溝から船載陶磁器や火鉢等が出土していることから豪族居館に推定されている。若菜裏道遺跡は北東2.3kmに位置し、溝1S D10からは12世紀後半の船載陶磁器が出土しており、広川荘の活動を示すものとみられている。高江遺跡は北東2.2kmに位置し、13世紀代の掘立柱建物・井戸・土壙墓が検出され、掘立柱建物S B01は梁行2間×桁行4間以上の両面廻建物で、土壙墓S T50からは湖州鏡・青磁皿・白磁皿が出土しており、富豪層の墓とみられている。久富大門口遺跡は北東3kmに位置し、13～14世紀代の区画溝が調査され、久富鳥居遺跡・久富斗代遺跡でも同時期の溝が検出されている。

熊野屋敷遺跡は北東3.2kmに位置し、土塁とその前後に掘削された堀が確認され、これらの遺構は熊野神社の神宮寺として保延4年(1138)の建立とされる坂東寺関連施設とみられる。また、熊野松ノ下遺跡・熊野五反田遺跡・熊野宮ノ後遺跡では、中世期の遺構・遺物が確認され、熊野神社及び坂東寺との関連が推定されている。この他に、鶴田横原遺跡は市域の東部に位置し、掘立柱建物・区画溝・通路・土坑・周溝墓等が検出されており、在地領主の居館跡とみられている。

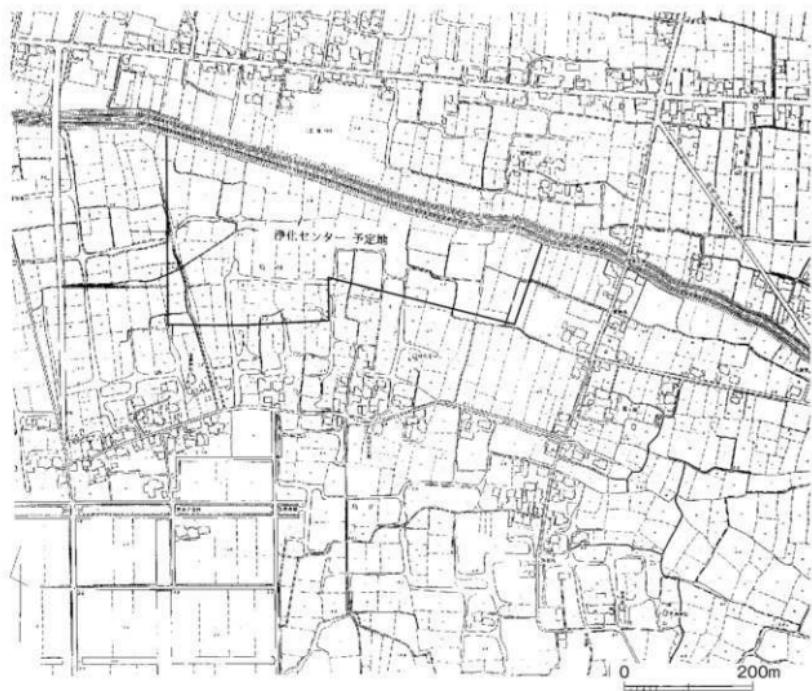
〔参考文献〕

- 小田和利 2001 「福岡・彼岸田遺跡」『木簡研究第23号』
小田和利 2003 「筑後市彼岸田遺跡出土の祝符木簡」『九州歴史資料館研究論集28』
筑後市 1997 筑後市史第1・3巻
筑後市教育委員会 1991 高江遺跡（筑後市文化財調査報告書第7集）
筑後市教育委員会 1993 榎崎遺跡（筑後市文化財調査報告書第9集）
筑後市教育委員会 1995 筑後北部第二地区遺跡群（筑後市文化財調査報告書第16集）
筑後市教育委員会 1998 久富大門口遺跡（筑後市文化財調査報告書第18集）
筑後市教育委員会 2004 中折地内栗遺跡（筑後市文化財調査報告書第54集）
筑後市教育委員会 2005 筑後北部地区遺跡群Ⅰ（筑後市文化財調査報告書第61集）
筑後市教育委員会 2005 筑後東部地区遺跡群Ⅱ（筑後市文化財調査報告書第62集）
筑後市教育委員会 2005 水田上町遺跡（筑後市文化財調査報告書第63集）
筑後市教育委員会 2005 筑後市内遺跡群Ⅳ（筑後市文化財調査報告書第67集）
筑後市教育委員会 2012 熊野屋敷遺跡（筑後市文化財調査報告書第101集）



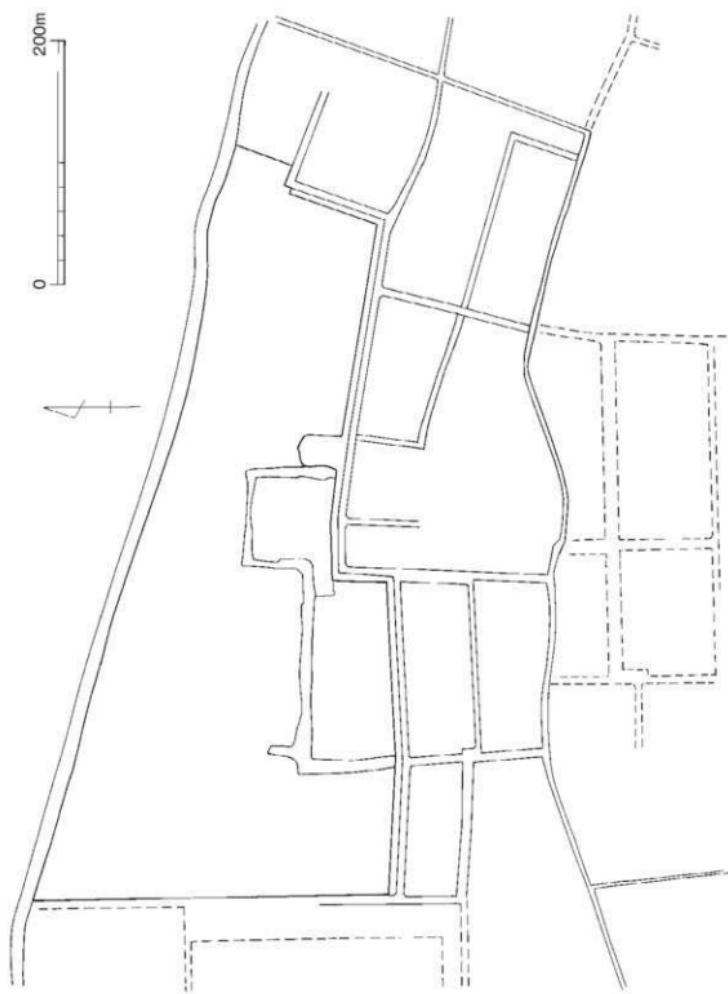
- 1 彼岸田遺跡(高田外屋敷遺跡) 2 梶崎遺跡 3 上北島羅島遺跡 4 水田上町遺跡 5 水田伊勢ノ脇遺跡
 6 水田下桜町遺跡 7 水田上仁良桑遺跡 8 折地長間寺遺跡 9 中折地内栗遺跡 10 長崎坊田遺跡
 11 長崎坊田遺跡 12 若素湖ノ江遺跡 13 若菜立森遺跡 14 若菜裏道遺跡 15 若菜森坊遺跡
 16 高江遺跡 17 久富斗代遺跡 18 久富大門口遺跡 19 久富鳥居遺跡 20 熊野屋敷遺跡
 21 熊野宮ノ後遺跡 22 熊野五反田遺跡 23 熊野松ノ下遺跡

第1図 彼岸田遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 彼岸田遺跡周辺地形図 (1/7,500)

第3図 俊澤田道跡周辺農地整備図 (1/4,000)



III 検出遺構

1 調査の概要

1次調査地は、終末処理場建設予定地の南西部にあたり、北縁及び西縁をクリークで囲まれた面積にして約7,700m²である。遺跡は標高4.5m前後の沖積低地に立地し、10cm前後の耕作土直下が遺構面となり、遺構は黄褐色粘質土・灰白色粘土に掘り込んでいる。5号溝南端部での基本層序は、上層から耕作土（厚さ約10cm）、灰白色粘土（厚さ約70cm）、灰青色粘土である。

発掘調査は、平成12年10月2日から開始した。1・9号溝は幅が4~8mで、深さは1.2m前後、長さは約120mにも及ぶ大規模なものであった。調査は年度末の3月16日に終了したが、調査区の西半部を掘削したに留まり、東半部は次年度以降に持ち越すこととなった。

検出した遺構には、14世紀後半~15世紀代の掘立柱建物2棟、大溝4条、溝6条、土坑2基、埋甕1基、近世墓があるが、大溝の掘削に主体をおいたため近世墓は遺構検出に留めた。出土遺物としては、土師器・陶磁器・木製品・金属製品・石製品及び呪符木簡がある。

2 掘立柱建物

1号建物（第4図）

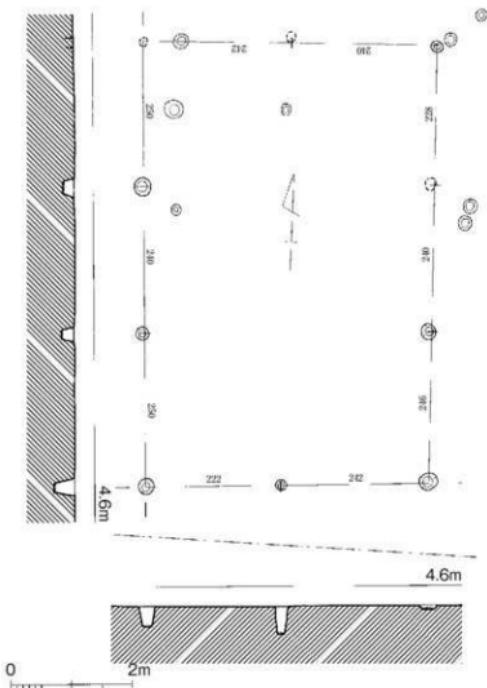
調査区の南西側で、2号建物の東側2mに位置する。梁行2間（4.82m）、桁行3間（7.4m）の南北棟建物である。柱間は梁側が2.2~2.42mで、桁側は2.28~2.5mとばらつきがみられる。

柱穴は円形を呈し、径16~26cmと貧弱な割には深さ40cm前後を測る。東側桁行方位は北から西に1°振っている。

なお、柱穴から遺物は出土していない。

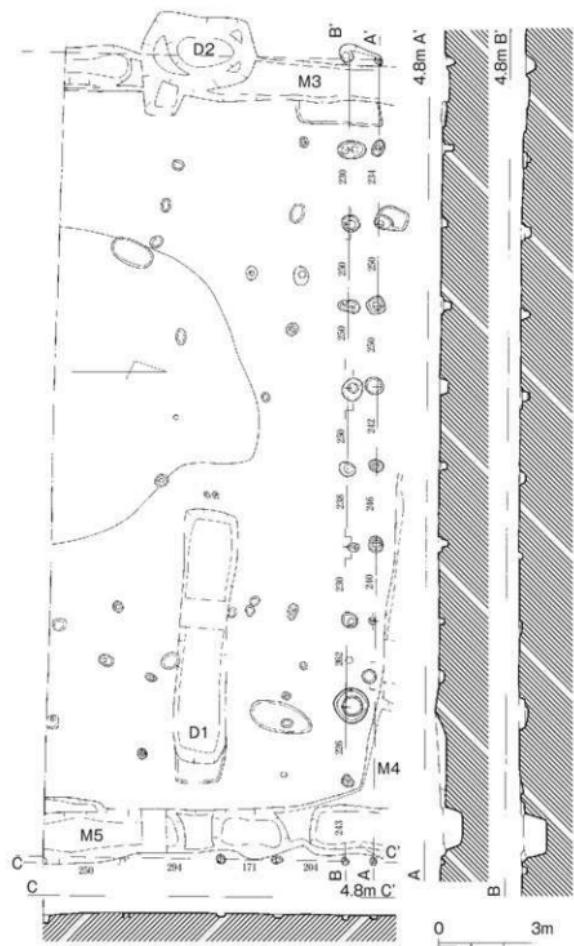
2号建物（第5図）

調査区の南西側に位置し、南側は調査区外に延びる。東側柱列は5号溝と重複し、西側柱列は3号溝及び2号土坑と重複するが、建物の方が溝・土坑より先行する。北側柱列



第4図 1号建物実測図 (1/80)

は長さ24.6mを測り、0.9m間隔で2列に配される。柱間は10間で、間隔は2.26~2.8mとばらつきがある。柱穴は円形を呈し、径0.2~0.5m、深さ0.1~0.3mの遺存状態であった。東側柱列は4間分を確認したが、島田外屋敷遺跡調査区Dには東側柱列の延長線上にピットが2個（付図網掛け）あり、これを1号建物の柱穴とみなすと南北7間以上（約17m）の建物になる。しかし、一辺24.6mの大規模な建物であることから家屋とかではなく、何らかの区画施設と考えられる。東側柱列の方位は、北から東に $1^{\circ} 30'$ 振っている。柱穴からの出土遺物はなかった。



第5図 2号建物実測図 (1/150)

3 溝

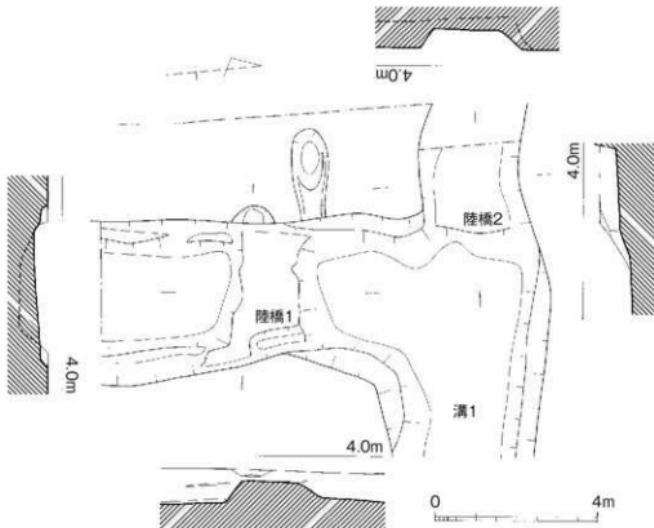
溝は10条検出したが、1・2・6・9号溝が幅4～8mの大溝で、3～5・8号が幅1.5m前後の小溝である。1・2・8・9号溝は10m単位でI～IV区と区切って掘削した。なお、調査区の東半部に位置する6・7号溝は遺構検出段階で終わっており、詳細な規模・時期はつかめていない。

1号溝（図版1～4、第6・8図・付図）

調査区の南半部で検出した大溝で、東西長110mを測るが、さらに調査区外に延びる様相をみせる。西側で南に直角に折れるが、32m分を検出した。上面幅は3.8～4.5m、下端幅1.4～2.3mで、深さはIV区東側で0.7m、西隅部で0.8m、南端部で1.0mを測り、断面形は逆台形を呈する。

南端部での土層堆積状況は、上から暗褐色土（①層）、暗褐色土に黄色粘土混じりの層（②層）、②層より黄色粘土が少ない層（③層）、灰色粘土（④層）、暗灰色粘土（⑤層）、⑤層に炭多く含む層（⑥層）、黒灰色粘土（⑨層）、⑨層に植物遺体を含む層（⑩・⑪層）で、①が最上層、②～④が上層、⑤・⑥・⑨が中層、⑩が下層、⑪が最下層に大別でき、東西方向からの土砂流入が窺える。III区での土層堆積状況は、上から暗褐色土（①層）、①層に黄色粘土・炭含む層（②層）、①層に灰色粘土・黄色粘土が混じる層（③層）、灰色土（④層）、黒灰色土（⑤層）、⑤層に植物遺体を含む層（⑥層）で、①が最上層、②～④が上層、⑤が中層、⑥が下層に大別できる。

また、西隅部とその6m南側には陸橋を設け、出入り口としている。陸橋1は幅1.5mで、現状で上面からの段差は20cm程を測る。西壁側には1m大の半円形の掘込みがあり、ステップになるか。陸橋2は1号溝の西側延長線上に設けられ、幅は不詳であるが上面からの段差は45cmを測る。溝の埋土中からは、土師器壺・瓦質鉢・陶器甕、木製品及び最上層から染付皿等が出土している。



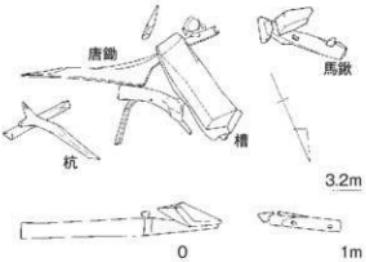
第6図 1号溝陸橋部1・2実測図 (1/120)

2号溝（図版1・2・5、第7・8図、付図）

内部施設を方形に囲む大溝で、北半部を検出したが、島田外屋敷遺跡調査区DのSD35と一連の溝とみられる。6号溝と重複するが、前後関係は判然としない。北側溝は東西長65mで、1号溝から6mの間隔で配される。西端部は1号溝に接続するが、ベルトとして掘り残したため明らかではないが、陸橋部になる可能性を有する。西側溝は21m分を確認したが、SD35まで含めると30m分確認したことになる。上面幅はIV区東側で8.0m、西隅部で5.0m、I区南端で7.0mを測り、深さはIV区東側で1.1m、西隅部で1.15m、II区北側が1.43m、南端部で1.5mを測る。南端部底面の標高は3.05mで、SD35底面の標高が3.4mなので、I・II区が他に比して0.4m深いことになる。断面形状は逆台形をなすが、1号溝に比して立ち上がりはやや緩やかである。

南端部での土層堆積状況は、上層から褐色土（①層）、暗褐色土（②層）、①層と黄褐色土の混合土（③層）、黄褐色土と①の混合土（④層）、④層より①層が多い層（⑤層）、灰色粘質土（⑥層）、黒色粘質土（⑦層）、褐色土（⑧層）、黒灰色土（⑨層）、⑨層に植物遺体を含む層（⑩層）で、①～⑥が上層、⑧・⑨が中層、⑩が下層に大別できる。

出土遺物としては、筆頭に呪符木簡があげられる。II区東肩部上層から出土した。次にIII区下層出土の木製品で、付図の×印で示したヶ所からは馬鍔・唐銚・槽・杭が、やや離れて漆器椀が底面に密着した状態で出土している。この事は、溝が耐水した状態ではなく、泥濘の状態－空堀であったことを示している。他に、土師器、陶磁器、砥石・茶臼等多くの遺物が出土した。



第7図 2号溝木製品出土状況実測図 (1/30)

3号溝（図版1・2・5、付図）

2号溝の2.5m西側で検出した南北方向の溝で、島田外屋敷遺跡調査区DのSD30と一連の溝とみられる。2号建物を切り、2号土坑に切られる。長さ19mを検出したが、SD30南端までだと28mを測る。上面幅は0.8～1.4mで、深さは北側が0.36m、4号溝との接続ヶ所が0.18m、南端部が0.23mを測り、底面は南側に緩やかに傾斜する。また、北端は2号溝に接続するが、そこから5m南側のヶ所が幅0.6mと若干狭くなっている。埋土中から土師質の擂鉢と瓦質の鉢が出土している。

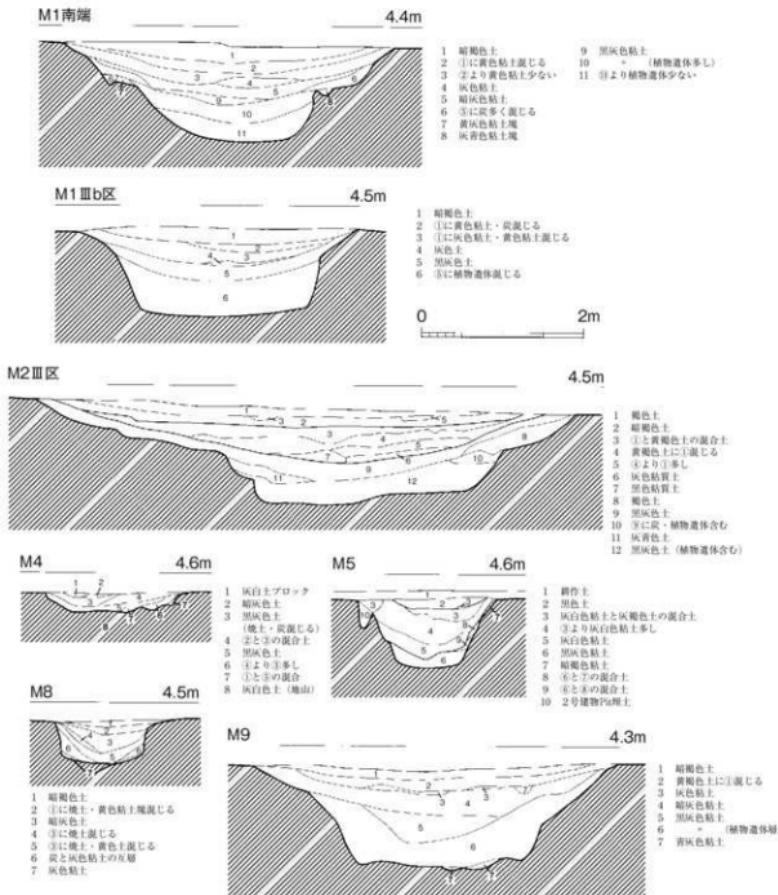
4号溝（図版2、第8図、付図）

2号溝の5m南側で検出した東西方向の溝で、2号建物を切っている。西側は3号溝に、東側は5号溝に接続し、3～5号溝全体としてはH形をなし、三者は一連のものである可能性が高い。長さ22.0mを測り、上面幅は東側が3.0m、西側が4.0mで、深さは東側が0.13m、中央部が0.17m、西側が0.13mであり、東側に下がっている。また、3号溝との接続ヶ所が1.1mと狭くなっている。埋土は黒灰色土を基調とし、焼土・炭を含んでいた。土師器壺・皿が出土した。

5号溝（図版2・8、第8図、付図）

1号建物の2m西側に位置する南北方向の溝で、2号建物を切り、北端は2号溝に接続する。上面幅1.3~2.0mを測り、深さは4号溝との接続ヶ所が0.72m、南端が0.95mで、1号土坑東側は12cmと浅くなっている、南北両側に排水したと考えられる。また、この部分は陸橋になろう。ただ、鳥田外屋敷遺跡調査区Dでは5号溝の延長部を検出してしないため、未調査区間で溝が終焉し、調査区Dに入り口部が想定される。溝の断面形は逆台形を呈する。

溝の埋土は、上層から黒色土（②層）、灰白色粘土と灰褐色土の混合土（③層）、③層より灰白色粘



第8図 1・2・4・5・8・9号溝土層実測図 (1/60)

土が多い層（④層）、灰白色粘土（⑤層）、黒灰色粘土（⑥層）の順で、②が上層、③～⑤が人為的に埋めた土層で、⑥が下層の堆積土である。遺物は瓦質の捕鉢が出土した程度であった。

6号溝（図版1、付図）

調査区の南側中央で検出した南北方向の溝で、1・2号溝と重複するが、遺構検出で終わったため前後関係等詳細は不明。南側での上面幅は6.0mを測る。

7号溝（図版1）

調査区の南東側で検出した東西方向の溝で、長さ35m以上を確認した。2号溝と対をなす形で位置し、7号溝の南側は谷部を埋めて整地している。ただ、遺構検出で終わったため詳細は不明。

8号溝（図版1・2・6・7、第8図、付図）

調査区の北西部で検出した東西方向の溝で、1号溝と9号溝との間に位置する。長さ63.6mを測り、東端で南側に直角に折れ、6号溝に接続する。上面幅は東端部が1.3m、中央部が2.3m、西端部は1.3mで、深さは中央部が0.71m、西端部が0.33mで、底面は東側に下がるものとみられる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、断面は方形を呈する。

溝の埋土は、上から暗褐色土（①層）、①層に黄色粘土ブロック・焼土を含む層（②層）、暗灰色土（③層）、③層に焼土を含む層（④層）、③層に黄色土ブロックを含む層（⑤層）、炭と灰色粘土の互層（⑥層）、灰色粘土（⑦層）で、土層に焼土と黄色粘土或いは黄色土ブロックを含む点が注目される。遺物はⅡ区東半部から纏まって土師器皿・壺、青磁碗が出土している。

9号溝（図版1・2・6、第8図、付図）

調査区の北西部で検出した東西方向の大溝で、8号溝の5m北側に位置し、1号溝とは10～11mの間隔をもって並走する。両端部が調査区外に延びるため東西長は現状で114mで、現クリークまで含めると東西距離が150mを測ることから、長さ150m（一町半）の規模になるか。上面幅は西側で4.5m、Ⅲ区東側では7.3mを測るが、これは北縁に幅1m、南縁に幅2mの浅い段を持つためである。深さは西端部が0.9m、Ⅱ区東側で1.3m、Ⅲ区東側で1.23mを測り、底面はほぼ水平をなす。また、西端部にはテラスを有し、この部分が陸橋部となろう。

埋土は上層から暗褐色土（①層）、黄褐色土に①層混じりの土（②層）、暗灰色粘土（④層）、黒灰色粘土（⑤層）、⑤層に植物遺体を含む層（⑥層）で、①・②が上層、④が中層、⑥が下層となり、土層の堆積状況は1・2号溝に類似している。出土遺物には、土師器壺・皿・鉢・鍋、白磁皿、青磁碗、陶器・染付等がある。

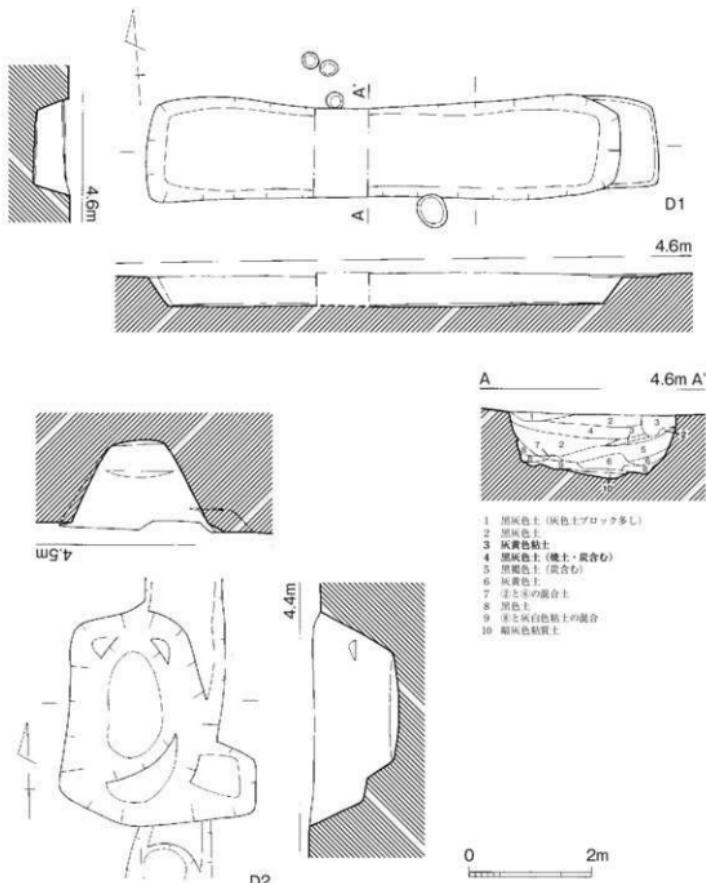
10号溝（図版1、付図）

調査区の西端部で検出した南北溝で、1号溝の2m西側に位置する。長さ15mを確認したが、北側は調査区外に延びる。上面幅30～50cmで、深さは10cm前後を測る。また、中央部が70cmほど途切れている。遺物の出土はなかった。

4 土 坑

1号土坑 (国版8、第9図)

2号建物内部で検出した土坑であるが、建物との前後関係は判らない。5号溝の0.8m西側に位置し、4号溝と平行して配される。平面形は長方形を呈し、長軸を東西方向に取る。長さ8.4m、幅1.64m、深さ0.52mを測る。東側には長さ0.6m、深さ4cmの段があり、削平が著しいもののテラスを有していたとみられる。底面は平坦で、ほぼ水平である。長軸方位は東から南に4°振る。埋土は黒灰色土を主体とし、4・5層には焼土・炭を含んでいた。遺物の出土はなかった。



第9図 1・2号土坑実測図 (1/80)

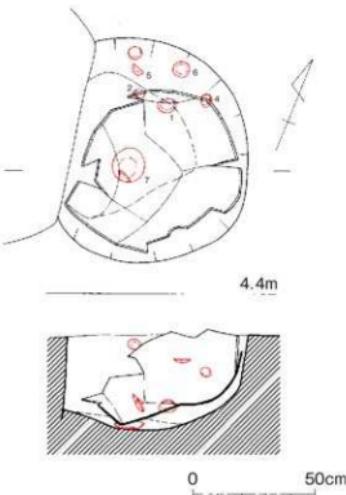
2号土坑（図版5、第9図）

調査区の南西側に位置し、当初、井戸とみなして掘削した。2号建物及び3号溝と重複するが、当土坑が溝を切っており、最も後出する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸3.5m、短軸2.5m、深さ1.4mを測る。北側に2ヶ所、南側に1ヶ所のテラスを有し、南側のそれは階段状をなしている。埋土は黒灰色土を主体とし、土師器皿・鍋、瓦質鉢、青磁碗が出土している。

5 埋 壑

1号埋壙（図版8、第10図）

調査区の南西側で、5号溝の北端東隣に位置する。掘方の西側に近世墓が掘削されているため、5号溝との前後関係はつかめなかった。備前焼の大壙を斜めに埋置したもので、掘方は円形を呈し、径0.9mを測る。後世の掘削により上半分を失うため深さ0.4mを測る程度である。壙を取り上げた所、壙の下から土師器皿・壺が出土しており、地鎮等の祭祀行為がなされたとみられる。或いは墓の可能性も考えられよう。主軸方位は北から西に70°振っている。



第10図 1号埋壙実測図 (1/20)



親子遺跡発掘体験実施風景

IV 出土遺物

彼岸田遺跡の調査では、建物・溝・土坑・埋甕等の遺構を検出したが、遺物は主として溝から出土している。その大半が土師器皿・壺であるが、陶磁器、木製品、金属製品、石製品も出土しており、中でも呪符木簡の出土は特筆される。

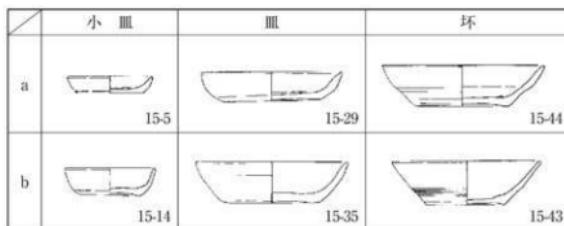
1 土器・陶磁器

皿・壺の分類

土師器の皿・壺に関しては、法量・形態から小皿・皿・壺に大別し、形態の差異により a・b に細分した。小皿は口径 5~7cm 前後、底径 4~6cm 程で、器高 1.5cm 程のものを a、器高 2.5cm 前後と a より深めのものを b とした。皿 a は口径 9cm 前後、器高 2cm 前後のもので、b は口径 12cm 前後、器高 2.5cm 程のものとした。壺は口径 12~13cm、底径 6~7cm のもので、体部が直線的に開き、作りがシャープなものを b とした。形態比率（口径 ÷ 底径 × 高さ）は、小皿 a が 1.4~2.7、小皿 b は 2.7~3.4 で、皿 a が 3.0 前後、皿 b が 3.5~4.5、壺 a は 5.0~7.8、壺 b が 7.0 前後を示す。また、小皿 b は口径/底径の数値が皿に近く、器高も近似する数値であるため形態比率が皿 b に近くなる。

皿・壺の調整・手法

皿・壺の器面調整は回転ナデを基調とし、底部切り離しは何れも糸切り離しにより、ヘラ切り離しのものは存在しない。色調は灰白色を主体とし、胎土には石英・角閃石等の粒子を含む。



第11図 皿・壺分類図 (1/4)

(1) 溝

1号溝出土器・陶磁器 (図版 9-1、第12図)

土師器小皿 a (1) 底部破片で、底径 4.7cm を測る。口縁部を欠くが、a 類か。Ⅲ区上層出土。

土師器壺 a (2) 口唇部はシャープで、体部は丸みを帯びる。外面はヘラケズリ後ナデによる。器高 3.3cm で、口径は 10.8cm、底径は 6.4cm に復原した。Ⅲ区上層出土。

土質土器擂鉢 (3) 底部小片で、内面には櫛歯による 8 本単位の条痕 (4 条/cm) がみられる。焼成は軟質で、色調は白黄色を呈する。Ⅱ区上層暗褐色土の出土。

瓦質土器鉢 (4・5) 4 は底部小片であるが、底径は 25.4cm に復原した。体部は内外面ともナデで、外底部はケズリによる。焼成は軟質で、内面灰褐色、外面黒灰色を呈する。Ⅲ区上層出土。5 は火鉢の底部から脚部にかけての破片で、Ⅱ区上層暗褐色土出土。下端部とその 2cm 上位に断面蒲鉾形の凸

帶を施し、その間を家紋風のスタンプ文で充填する。焼成はやや軟質で、明灰色を呈する。

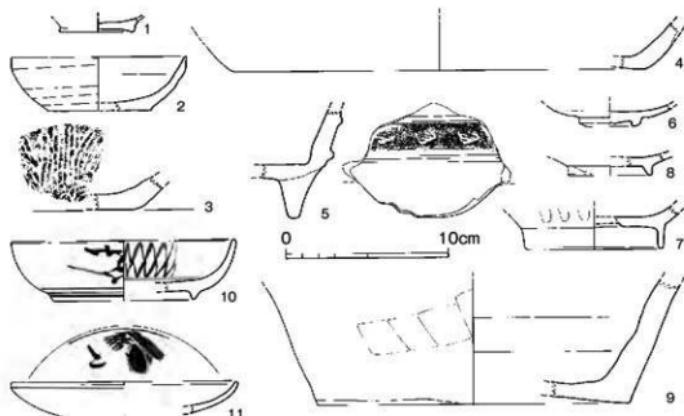
白磁皿（6） 底部破片で、高台径3.8cm。胎土は白色を呈し、内面は灰味を帯びた透明釉を施すが、体部外面から高台内にかけては露胎。I区下層出土。

青磁碗（7） 底部小片で、IV区東端部上層出土。蛇目高台で、高台は1.5cmと高く、高台径は8.6cmに復原した。内面及び外面は緑灰色の釉掛かりで、豊付から高台内は釉剥ぎ。

陶器皿（8） 底部破片で、高台径は5.2cmに復原した。黄灰色の胎に灰色の釉掛かりで、高台部は露胎。IV区東端部最上部の出土。

陶器甕（9） 底部破片で、復原底径19.2cm。外面は工具ナデで、内面は横方向のナデによる。焼成は堅緻で、灰青色を呈する。

染付皿（10・11） 10は器高3.7cmで、口径13.8cm、底径8.6cmに復原した。体部は内湾して立ち上がり、豊付は爪先立つ。呉須で体部外面唐草文、高台付近3重の圈線、内面は網代文を施す。11は口縁部小片で、復原口径14.0cm。口唇部の内外面に圈線を施し、内面にも図柄が描かれるが、小片なため図柄不明。10がIV区東端部最上層、11はI区上層の出土。



第12図 1号溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

2号溝I区出土土器・陶磁器 (図版9-2、第13図)

土師器壺a（1・2） 1は口縁部を欠くが深めの器形で、底径は5.5cm。2の体部は内湾気味に立ち上がる。器高は3.1cmで、口径11.7cm、底径7.4cmに復原した。形態比率4.9。

土師器羽釜（3） 体部には幅2cm程の大きめの鈎を巡らすが、口を外方に折り曲げることにより鈎となし、その上に粘土帶を貼付し口縁部とする。焼成は軟質で、灰褐色を呈する。外面に煤の付着は見られない。鈎径27.4cm。

須恵器擂鉢（4） 平底の底部破片で、復原底径13.0cm。底面には9本単位の櫛歯による条痕がみられるが、上位は条痕を留めないくらいに磨滅している。焼成は堅緻で、暗灰色を呈する。

瓦質土器鍋（5） 口縁部の小片で、口唇部は7mm程の平坦面を持つ。内面は細かいハケ目（9条/cm）、外側の口縁部直下は指オサエ、以下ハケ目による。口縁部付近の外側には煤が遺存する。

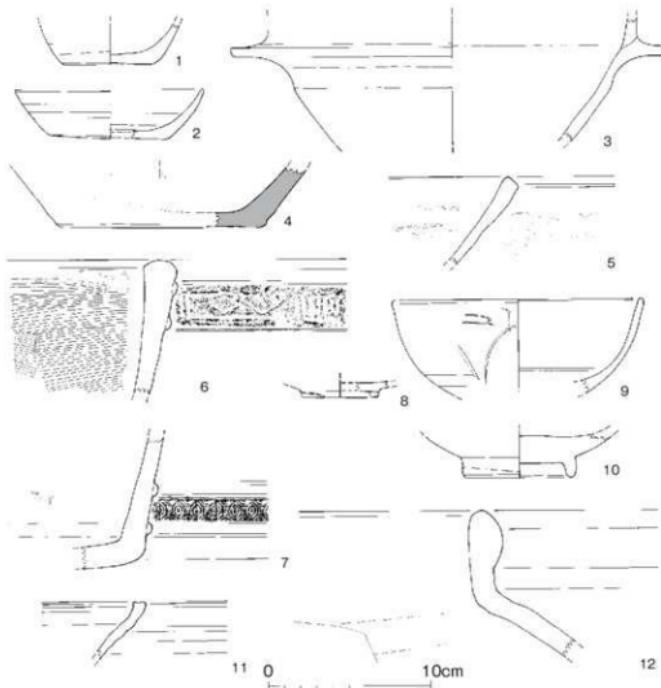
瓦質土器鉢（6・7） 6が口縁部、7は底部破片で、両者は別個体。6の口縁部は丸く納め、口縁部直下に断面台形の凸帯2条を1.5cm間隔で貼付し、その間を円弧による菱形文2個と縦線7本によるスタンプ文を施す。7も下端部のやや上位に断面台形の凸帯2条を1.6cm間隔で貼付し、その間を連続する円弧のスタンプ文で充填する。色調は6が暗灰色、7は紫灰色を呈する。

白磁皿（8） 底部破片で、復原高台径は4.7cm。高台の4ヶ所を半円形に切り込むため、疊付は4点で接地する。白色の胎に透明釉掛かり。高台内は釉剥ぎ。

青磁碗（9・10） 9が体部、10は底部破片で、両者は接合しないが同一個体。体部は内湾して立ち上がり、口縁部を丸く納める。外面には片彫りの蓮弁を施す。底部は1.8cmと肉厚で、高台も1.3cmと高め。見込みにも施文されている様だが、不明瞭。灰白色の胎に緑色の釉掛かり。

陶器鉢（11） 口縁部の小片で、口唇部は平坦面を持つ。褐色の胎に黒色の釉を口縁部内外面に施すが、それ以下は露胎。擂鉢であろうか。

陶器壺（12） 備前焼大甕の口頭部破片。口縁部は直立し、端部を肥厚させている。焼成は堅敏で、茶褐色を呈する。1号埋甕とは別個体で、2号土坑出土品と接合した。以上、黒灰色土の出土。



第13図 2号溝I区出土土器・陶磁器実測図(1/3)

2号溝II区出土土器・陶磁器（図版9-3・4、10-1、第14・15図）

黒灰色土

1~11は2号溝II区の中層にあたる黒灰色土出土品で、土層図の⑨層に該当する。

土師器皿a（1・2） 1は体部が内湾気味に立ち上がる。2の口縁部は外反し、口唇部はシャープなつくり。形態比率は1が2.04、2が2.57。

土師器皿a（3・4） 3・4は口径8.2~8.6cm、器高2.1~2.3cmの皿a類。3の口唇部は丸く納めるが、4の口唇部はシャープである。

土師器皿b（5） 底部は上げ底気味。器高2.4cm、口径11.2cm、底径7.0cm。

土師器環a（6） 6は口唇部を欠く。体部には回転ヘラケズリに伴う沈線状の段を有する。

瓦質器鉢（7） 火鉢の脚部破片で、両側面には半円形の抉りを施す。焼成は軟質で、灰黄色を呈する。

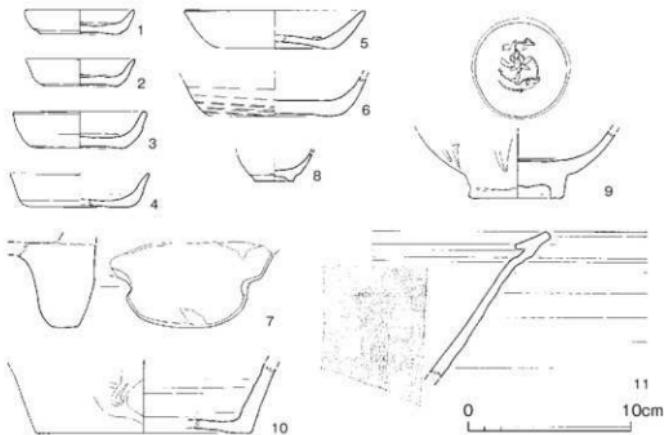
白磁小碗（8） 口縁部は内湾気味に立ち上がる。底部外面の下端部と内側を削り、高台としている。白色の胎に灰白色の釉掛かり。高台径は2.4cmを測る。

青磁碗（9） 体部下半の破片で、内湾して立ち上がる。外面には片彫りの蓮弁、見込みには圓線とその内側に唐草文を描く。底部は1.7cmと肉厚で、高台も1.4cmと高い。灰白色の胎に緑色の釉掛かりで、高台内は釉剥ぎ。また、高台内には漆状の膠着物がみられる。

陶器甕（10） 底部破片で、若干の上げ底をなす。焼成は堅緻で、胎土は灰色を呈する。外面には緑色の釉垂れがみられる。復原底径13.3cm。

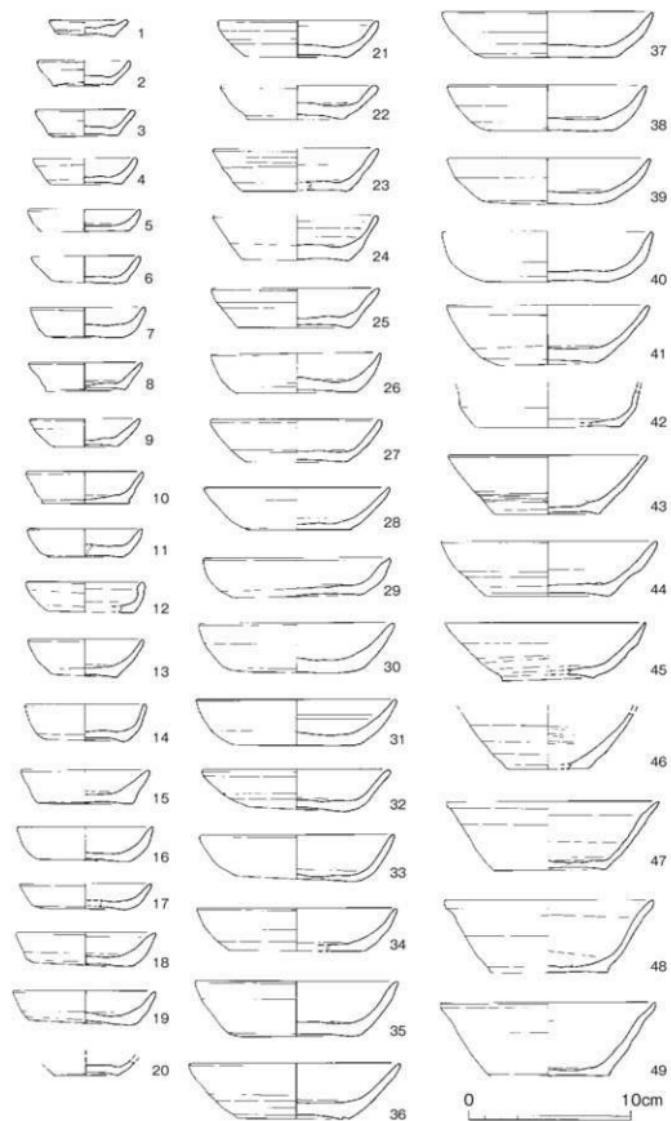
陶器擂鉢（11） 擂鉢の口縁部~体部下半にかけての破片。口縁部は鋤先状をなし、口縁部平坦面が内傾する。内面には13本を単位とする櫛歯による条痕がみられる。焼成は堅緻で、口縁部平坦面から外面にかけては焦げ茶色の釉掛かり。

黒灰色土



第14図 2号溝II区出土土器・陶磁器実測図① (1/3)

下層黒灰色土



第15図 2号溝 II区出土土器・陶磁器実測図② (1/3)

下層黒灰色土

1~49は2号溝Ⅱ区の下層となる植物遺体を含む黒灰色土出土品で、土層図の②層に該当する。

土師器小皿a (1~11・20) 1~11は器高1.0~1.8cm、口径5.0~7.0cm、底径3.6~5.5cmを測る。2・6・7・9・11は体部が内湾するもの。3・4・8・10は体部が直線的なものである。また、8・10の口唇部はシャープであるが、他は丸く納める。形態比率は、1.39~2.89の範疇。

土師器小皿b (12~14) 12~14は器高1.9~2.3cm、口径7.1~7.5cm、底径4.0~5.2cmを測る。12・14は体部が直立気味に立ち上がる。形態比率は、2.7~4.08の範疇。

土師器皿a (15~19・21・22) 15~19は器高1.6~2.3cm、口径8.0~9.9cm、底径5.6~6.4cmを測る。体部が内湾する16・21・22と直線的に開く15・17~19がある。形態比率は、2.03~3.67。

土師器皿b (23~29・32~34) 23~29・32~34は器高2.4~2.8cm、口径10.1~12.4cm、底径6.6~8.5cmを測る。何れも体部は内湾気味に立ち上がる。口唇部のシャープな26を除き、丸く納めている。形態比率は3.33~4.83を示す。

土師器壺a (30・31・35~42・44~49) 30・31・35~42・44~49は器高2.8~4.5cm、口径12.1~13.3cm、底径6.9~8.5cmを測る。何れも体部は内湾して立ち上がるが、47~49は口縁部を外反させている。口唇部は丸く納めるが、39・40・45・47はシャープである。形態比率は4.52~7.92。

土師器壺b (43) 43は壺aに比して口が大きく開くもので、器高3.6cm、口径12.3cm、底径6.4cmを測る。体部外面には工具によるカキ目風の沈線を4条施す。

2号溝Ⅲ区出土土器・陶磁器（図版10-2、第16図）

最上層

1~9は2号溝Ⅲ区の最上層出土品で、土層図の①層にあたる。

土師器皿a (1) 1は口唇部を欠く。底径5.5cmに復原した。

土師器皿b (2~4) 2~4は器高2.3~2.7cm、口径10.2~14.2cm、底径7.2~10.2cmを測る。2・3の口唇部はシャープである。

土師器鉢 (5) 口唇部に平坦面を有し、その直下に細い沈線を1条施している。

陶器壺 (6) 口縁部の小破片。口縁部を外側に折り曲げ肥厚させ、上部に平坦面を持つ。釉は茶色を呈する。

陶器碗 (7) 口縁部の小破片で、屈曲して立ち上がる。灰褐色の胎に船軸掛かり。

陶器皿 (8) 肉厚の底部破片。灰色の胎に灰味を帯びた釉薬を施す。高台部分は露胎。

染付皿 (9) 口縁部小片。口唇部直下の内外面には呉須による圈線を施し、外面にも図柄が描かれるが、モチーフは不明。口唇部は口禿。

上層

10~17は2号溝Ⅲ区の上層出土品で、土層図の②層にあたる。

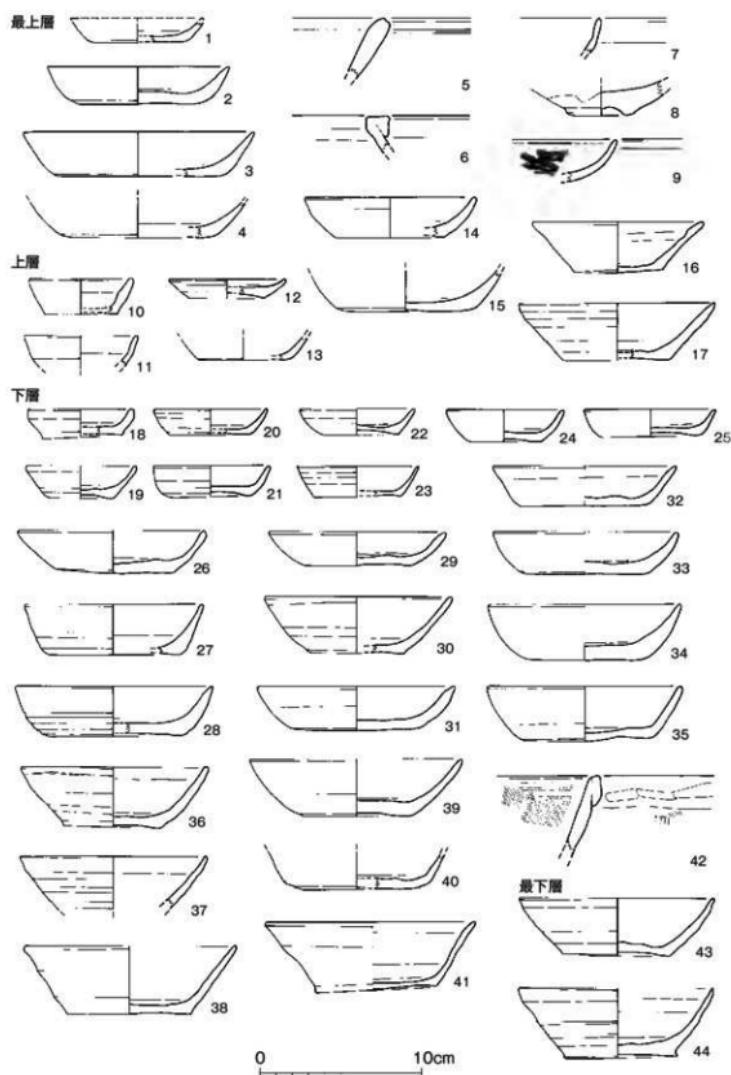
土師器小皿a (12・13) 12は器高1.2cmで、口径7.2cm、底径4.8cmに復原した。体部はヘラナデによる段を有する。13は体部破片で、口唇部を欠く。復原底径は5.8cm。

土師器小皿b (10・11) 10・11とも底部を欠く。口径は10が6.4cm、11が7.0cmに復原した。10の口縁部は肥厚する。

土師器皿a (14) 14は復原口径10.5cmの皿a類。体部は内湾して立ち上がる。

土師器皿 b (15) 15は口唇部を欠くが、復原底径が8.6cmであることからb類とした。

土師器環 b (16・17) 16・17は体部から直線的に口が大きく開くもので、16は外反気味に開く。



第16図 2号溝Ⅲ区出土土器・陶器実測図 (1/3)

形態比率は16が5.92、17は6.46を示す。

下層

18~42は2号溝Ⅲ区の下層出土品で、土層図の⑫層にあたる。

土師器小皿a (18~24) 18~24は器高1.6~1.9cm、口径6.6~7.4cm、底径4.0~5.2cmを測る。何れも体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部を丸く納めるが、22・23の口唇部はシャープ。

土師器皿a (25) 器高1.7cm、口径8.2cm、底径6.1cmと口径に比して低めの器高。

土師器皿b (26~29・31・32~35) 皿bとした26~29・31・32~35は、器高2.1~3.4cm、口径11.0~12.2cm、底径6.4~9.0cmを測る。口縁部は何れも内湾して立ち上がり、口唇部を丸く納めるが、31の口唇部は指で引き出している。28の下半部には沈線状の段を有する。

土師器壺a (30・36・37・39・40) 30・36・37・39・40は器高3.5cm、口径11.5~13.1cm、底径5.8~6.8cmを測る。体部はやや丸みを帯びて立ち上がる。

土師器壺b (38・41) 38・41は器高が4.3cmと高目で、体部は直線的に開く。

土師質土器鉢 (42) 口縁の小破片。口縁端部に幅2cmの粘土帯を貼付し、肥厚させる。内面はハケ目(10条/cm)、外面ナデによる。

最下層

43・44は2号溝Ⅲ区の最下層出土品。

土師器壺a (43・44) 43は器高3.6cm、口径12.0cm、底径6.6cmで、44は器高4.3cm、口径12.0cm、底径7.0cmを測る。両者とも体部から内湾気味に立ち上がる。44はシャープな作り。

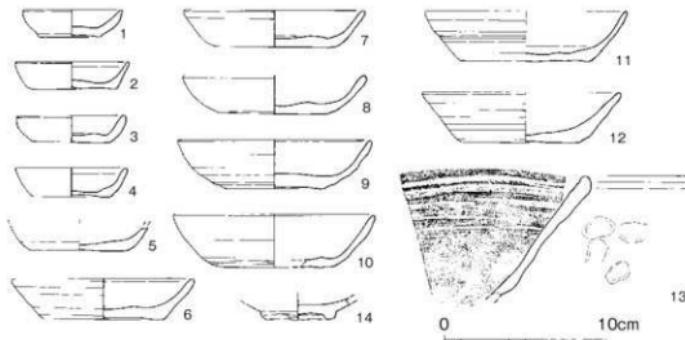
2号溝Ⅳ区出土土器・陶磁器 (図版11-1、第17図)

1~12が下層(黒灰色土)出土で、13・14はⅣ区からの出土品。

土師器小皿a (1~4) 1~4は器高1.7cm、口径6.1~7.0cm、底径3.8~4.8cmを測る。2の口唇部はシャープで、3は肥厚させる。

土師器皿a (5) 口唇部を欠く。復原底径は6.0cm。

土師器皿b (6~12) 6~12は器高2.3~3.1cm、口径11.3~12.4cm、底径6.1~8.1cmを測る。基本的に、体部は内湾して立ち上がるが、7・12は口縁部が若干外反する。8の口縁部は肥厚する。



第17図 2号溝Ⅳ区出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

土師質土器鍋（13） 口縁部の小片だが、体部は直線的に開く。内面は工具によるナデ、外面はナデで、ユビオサエがみられる。口唇部から体部外面にかけて煤が付着している。

白磁皿（14） 底部の小破片。高台の4ヶ所を半円形に切り込むため縫合は4点で接地する。灰色の胎に透明釉掛かり。高台付近は露胎。

3号溝出土土器（第18図）

土師質土器鉢（2） 口縁～体部破片で、口唇部は丸く納める。口縁の一部を外方に押し出し、片口とする。内面には6本単位の櫛歯による条痕がみられる。焼成は軟質で、灰黄色を呈する。

瓦質土器鉢（1） 口縁部小片で、端部は肥厚し、平坦面を有する。ヨコナデを基調とし、外面にはユビオサエがみられる。焼成は良好で、内面黒紫色、外面灰白色を呈する。1が北端部、2は南端部の出土。

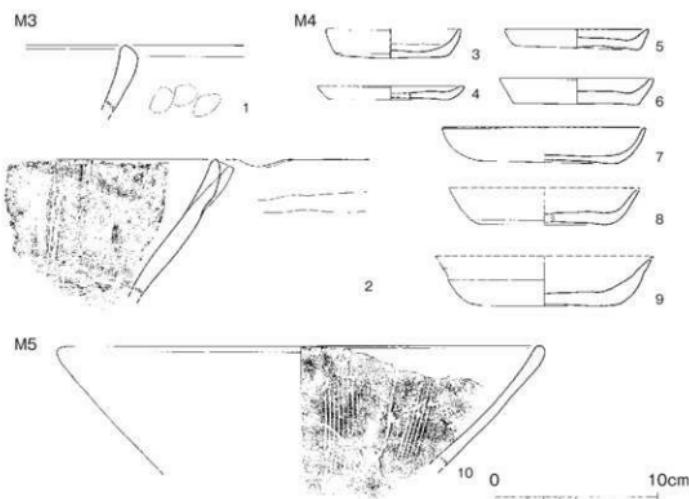
4号溝出土土器（図版11-2、第18図）

土師器皿a（3～6） 3は器高1.8cm、口径8.3cm、底径6.8cmで、形態比率2.2。4～6は器高が0.9～1.5cmと低いもので、煎餅皿と言うに相応しい。何れも東端部の出土。

土師器皿b（7～9） 7は器高2.2cm、口径12.5cm、底径8.6cm。体部は内湾して立ち上がる。8・9は口縁部を欠くが、シャープなもの。ただ、9の底部は肉厚。7は東端部、8・9は中央部の出土。

5号溝出土土器（図版11-3、第18図）

瓦質土器鉢（10） 口縁～体部破片で、復原口径は30.0cm。口唇部に僅かな平坦面を持つ。内面には8本単位の櫛歯による条痕がみられる。焼成は軟質で、内外とも紫灰色を呈する。



第18図 3～5号溝出土土器実測図（1/3）

8号溝出土土器・陶磁器（図版11-4、第19図）

土師器小皿 a (1) 1は器高1.7cm、口径6.7cm、底径5.0cmを測り、形態比率は2.28。口唇部に油煙が付着しており、灯火器として使用している。

土師器皿 a (2~4) 2は器高1.5cm、口径6.9cm、底径6.0cmで、器高が低い煎餅皿。3・4は口唇部を欠く。底径は3が6.9cm、4は7.2cmに復原した。

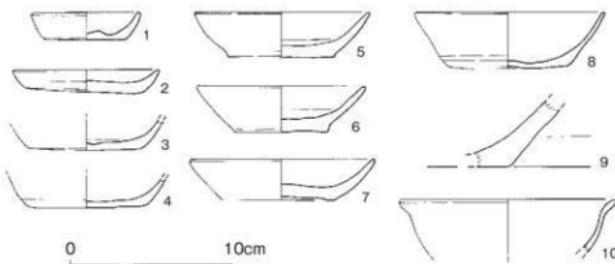
土師器皿 b (5~7) 5~7は器高2.6~2.8cm、口径10.3~11.4cm、底径5.8~7.0cmを測る。何れも内渦して立ち上がるが、5・6は体部の厚さに比して底部は肉厚。5の口唇部はシャープである。

土師器壺 a (8) 8は器高3.5cm、口径11.7cm、底径7.3cm。器壁は薄くシャープな作り。

土師質土器鉢 (9) 底部小片で、磨滅により条痕はみられないが、擂鉢になるか。

青磁碗 (10) 口縁部～体部にかけての破片。口縁部は如意形に屈曲し、復原口径13.6cmを測る。

灰色の胎に緑灰色の釉掛かり。胎土に砂粒を殆ど含まず精良。



第19図 8号溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

9号溝I区出土土器（図版11-5、第20図）

1~7は何れも上層の灰色粘土出土で、土層図の③層に対応する。

土師器小皿 a (1) 1は器高1.0cm、口径5.8cm、底径4.3cmの煎餅皿。

土師器小皿 b (2・3) 2・3は器高2.0cmで、口径は2が6.6cm、3が7.4cm、底径は2が4.4cm、3が5.1cmを測り、形態比率は2が3.0、3は2.9を示す。

土師器皿 a (4) 4は肉厚の皿で、器高2.5cm、口径10.3cm、底径7.0cmを測る。

土師器皿 b (5) 5はシャープな作りの皿で、底部は丸みを帯びる。器高2.5cm、口径11.5cm、底径9.0cm。

土師質土器鉢 (6・7) ともに口縁部破片で、口縁端部の外側に幅1.5cm余りの粘土帶を貼付し、口縁部を肥厚させている。内面はハケ目で、7のそれは11~14条/cmと6より細かい。また、7の外面には煤が付着している。

9号溝II区出土土器（図版11-5、第20図）

土師質土器擂鉢 (8) 擂鉢の底部破片で、内面には5本単位の櫛歯による条痕がつく。底径は12.0cmに復原した。

9号溝Ⅲ区出土土器・陶磁器（図版11-5、第20図）

9~18・20~22が暗褐色土、19が暗灰色粘土の出土で、暗褐色土は最上層、暗灰色粘土は土層図の④層に対応する。

土師器皿 a (9) 口唇部を欠く。底径は6.8cmに復原した。

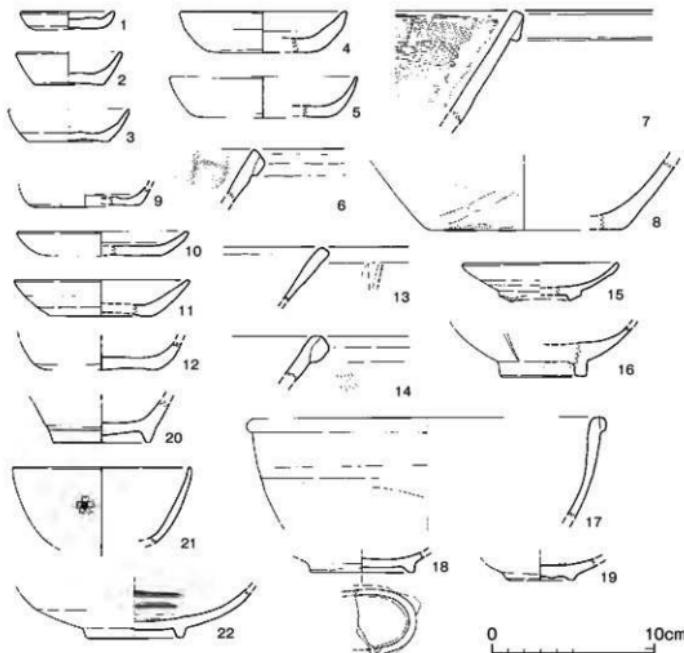
土師器皿 a (10・11) 10は器高が1.5cmと口径に比して低めの器形。11は器高2.2cmで、口径は10.8cm、底径は6.2cmに復原した。体部は直線的に開く。

土師器壺 a (12) 口縁部を欠くが、体部の立ち上がりが急であることから壺とした。内面には煤の付着がみられる。

土師器鉢 (13) 口縁部の小片。口唇部には5mm程の平坦面を有する。口縁部に比して体部の器壁は薄い。内面ナデで、外面は工具によるナデ。

土師質器鍋 (14) 口縁部の小破片。口縁端部に断面蒲鉾形の粘土帯を貼付し肥厚させる。口縁端部は面取りしている。

白磁皿 (15) 全体の形状が判る皿で、器高2.3cm、口径9.6cm、高台径5.1cmを測る。高台の4ヶ所を半円形に切り込むため疊付は4点で接地する。灰白色の胎に透明釉掛かりだが、体部下半～高台内にかけては露胎。見込みには目跡が4ヶ所みられる。



第20図 9号溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

青磁碗（16） 碗の底部破片で、復原高台径は5.3cmを測る。外面には片彫りの蓮弁を施す。灰白色の胎に緑味を帯びた透明釉を施すが、縦付部分のみ釉剥ぎ。

陶器皿（18・19） 18の高台は梢円形を呈し、体部は打欠き後に側縁を研磨している。灰色の胎にオリーブ色の釉を施すが、縦付のみ釉剥ぎ。19も底部破片で、高台径4.2cm。灰色の胎に透明釉を施す。見込みに6ヶ所及び縦付にも目跡がみられる。

陶器捏鉢（17） 口縁部～体部にかけての破片で、口径は22.0cmに復原した。口縁端部に断面蒲鉾形の粘土帯を貼付し肥厚させる。内面は使用により擦れている。暗橙色の胎に深緑色の釉掛かけであるが、外面の下半部は露胎。

染付碗（20・21） 20は底部破片で、復原高台径は6.0cm。縦付から1cm上の部位を削り段を設け高台とする。体部は直線的に立ち上がる。高台には1条の圓線を施す。灰白色の胎に透明釉を施すが、縦付は釉剥ぎ。21は口縁部破片で、口径は11.0cmに復原した。体部外面の中程には呉須による五弁花文を施す。白色の胎に透明釉掛かり。

染付皿（22） 体部下半の破片で、立ち上がりが緩やかであることから皿とした。内面には二重の圓線を施す。灰白色の胎に緑味を帯びた透明釉を施すが、縦付は釉剥ぎ。復原高台径は6.1cm。

（2）土 坑

1号土坑西側出土土器（第21図）

土師器皿 b（1） 1は1号土坑西側の整地層出土の土器で、直接1号土坑に伴うものではない。口唇部を欠く。底径は10.0cmに復原した。

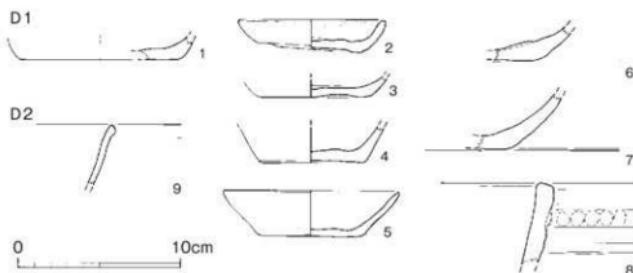
2号土坑出土土器・陶磁器（図版11-6、第21図）

2・6～8は上層出土、3～5は東側テラスの出土。

土師器皿 a（2・3） 2は器高2.0cm、口径9.1cm、底径5.2cmを測る。口唇部内外面には油煙が遺存し、灯火器として使用している。3は口唇部を欠く。底径は6.6cmに復原した。

土師器壺 a（4・5） 4は口唇部を欠くが、底径が6.6cmを測ることから壺aとした。5は器高2.8cm、口径10.8cm、底径6.6cmを測る。体部は直線的に開き、口唇部はシャープである。

土師質土器鍋（6・7） 6・7は鍋の底部破片で、内外面には煤がみられ、6の内面には炭化物が厚く遺存する。



第21図 1・2号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）

瓦質土器鉢 (8) 口縁部付近の小片。口縁部直下を窪め、円形浮文を貼付するも剥落している。

青磁碗 (9) 口縁部破片で、端部が小さく外反する。

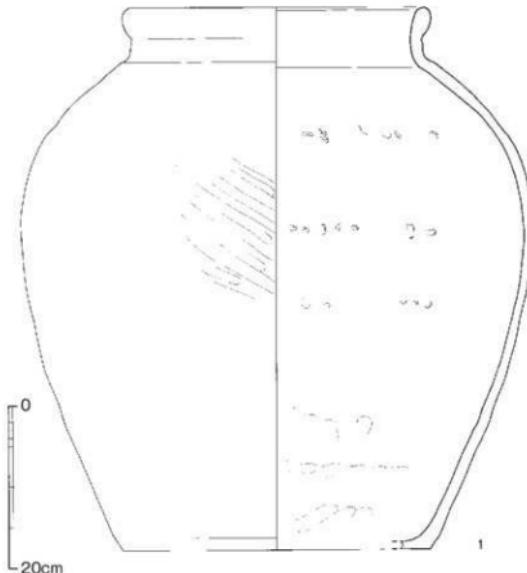
(3) 埋 墓

1号埋壺 (第22図)

陶器壺 (1) 1号埋壺に使用していた備前焼の大壺。器高は67.0cmで、口径38.0cm、底径38.0cmに復原した。

口縁部は断面蒲鉾形を呈し、短い頸部から撫で肩の肩部に移行する。口径と底径が等しく、ずっと安定感のある土器である。

外面は工具によるナデ上げで、内面には当具痕がみられる。焼成は堅緻で、色調は海老茶色を呈する。また、肩部には灰が被る。



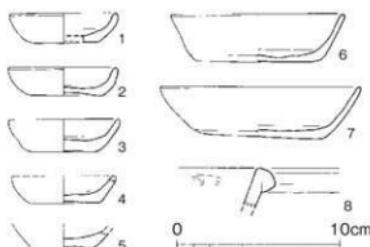
第22図 1号埋壺実測図 (1/6)

1号埋壺下部出土土器 (図版12-1、第23図)

土師器小皿 b (1~3) 1~3は器高1.7~2.0cm、口径6.7~6.9cm、底径4.0~4.4cmで、形態比率は1が2.9、2が2.6、3が3.3であり、小皿bの範疇に収まる。4・5は口縁部を欠き、a・b何れかは不明。

土師器壺 a (6・7) 体部は平底の底部から斜め上方に立ち上がる。器高は6が3.0cm、7が3.2cm、口径は6が10.7cm、7が12.4cm、底径は6が7.3cm、7が7.4cmで、形態比率は6が4.4で、7が5.3となる。

土師質土器鍋 (8) 口縁部小片で、端部には断面台形の粘土帯を貼付する。口縁部ヨコナデで、内面はハケ目。外面には煤が付着している。後述する整地層出土品(第24図2)とは別個体。



第23図 1号埋壺下部出土土器実測図 (1/3)

(4) 整地層

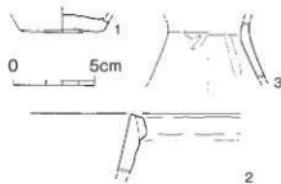
杭15西半部出土土器・陶磁器（第24図）

杭15西半部は7号溝南側に該当し、谷部を埋めた整地層から土師器・陶器が出土している。

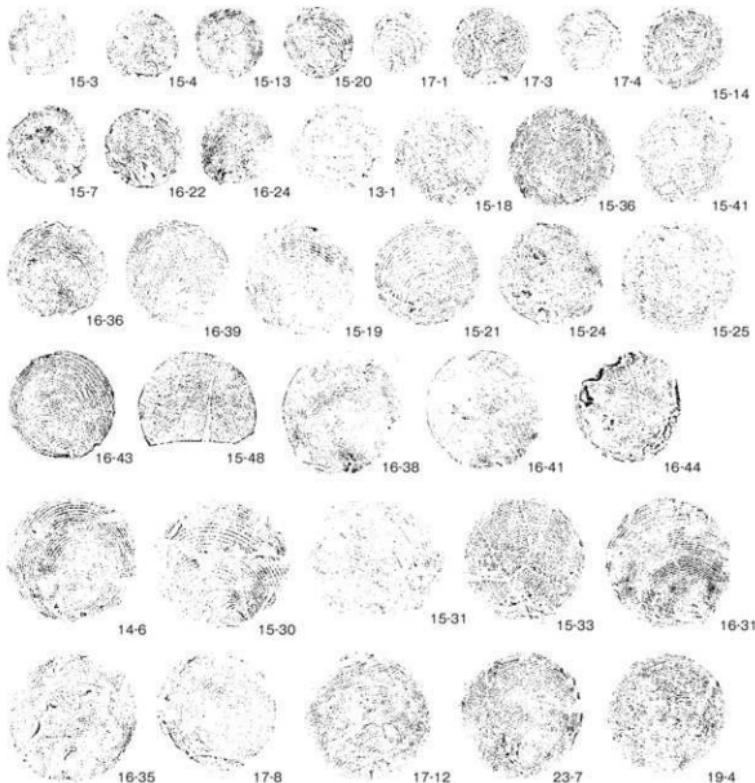
土師器小皿（1） 口縁部を欠くためa・b何れか不明。底径は5.3cm。

土師質土器鍋（2） 口縁部小片で、端部には断面台形の粘土帶を貼付する。内面ナデで、外面にはユビオサエがみられる。また、外面には煤が厚く付着している。

陶器瓶（3） 頸部の小破片で、釉薬は緑色に発色する。



第24図 杭15西半部出土土器・陶磁器
実測図 (1/3)



第25図 土師器系切り拓影 (1/3)

2 呪符木簡（巻頭図版2-2・図版13、第26図）

呪符木簡は、2号溝II区東肩部上層から頭部を上にして出土しており、溝がある程度埋まりかけた状態での投棄を示している。短冊形をなし、頭部を圭頭形に削っている。長さ28.4cm、最大幅9.3cm、厚さ0.8cmを測り、木簡分類の011型式に該当する。墨書は裏面の下端部を除き殆ど遺存していないが、墨書の痕跡がレリーフ状に浮き出ており、文字の判読は可能である。

・「天形星王八王」

・「(符 錄) 天星 (符 錄) 九、八十一

二七九八

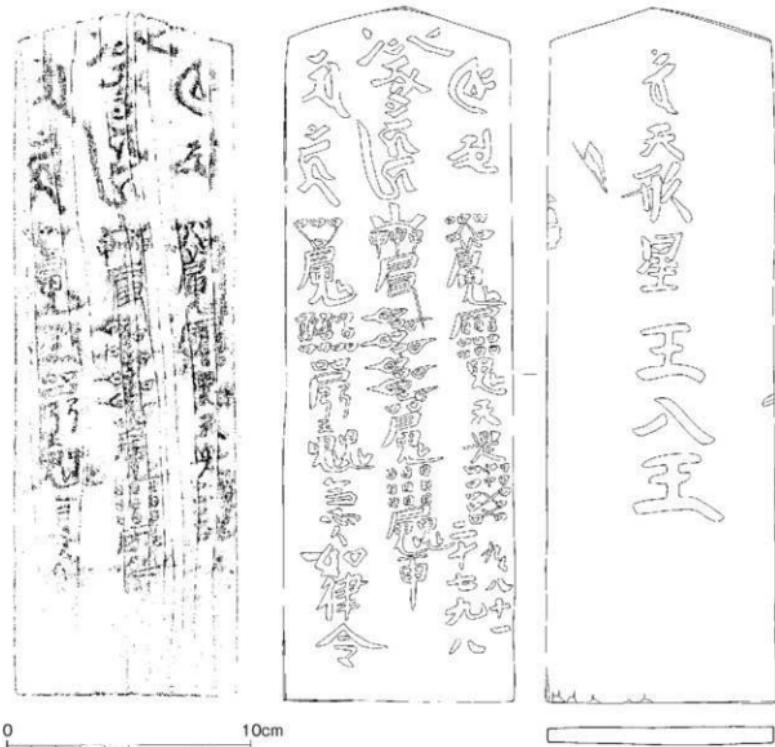
篆文 (符

錄) 一申

文真 (符

錄) 急、如律令」

表面は中央に1行墨書があり、1字目の梵字はパンで、大日如来の種子。その下に「天形星王八王」とある。天形（刑）星は本星のことと、歴上では歲刑星とされ、疫鬼を退治する神として将来された。「地獄草紙」には牛頭天王及びその眷属の疫神を酢に漬けて喰らう強力な遊邪神として描かれている。



第26図 呪符木簡実測図 (1/2)

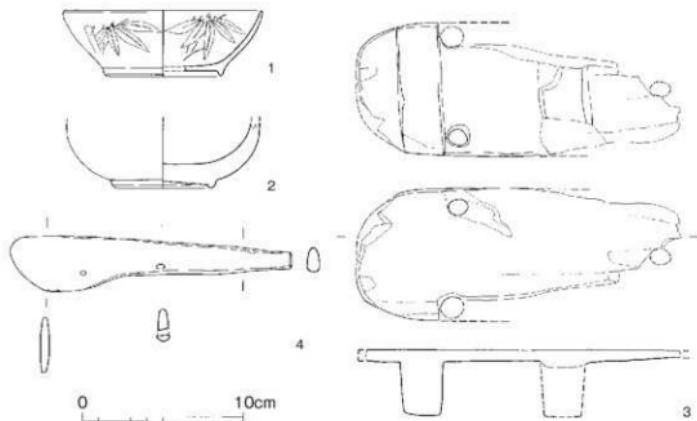
また、「埴内伝」によると、八王とは牛頭天皇の八王子・八将神と述べている。

裏面には3行墨書がみられ、上部に梵字、中央に符籙、下部に文字がある。1行1字目の梵字はジクで、般若心経または般若菩薩の種子。2字目はアで、文殊菩薩の種子か。その下に符籙があり、「天罡」、符籙、「九、八十一 二七九八」と九九の数字が記されている。「天罡」とは北極星のこと、道教では天罡大型として非常に尊崇されている。2行目の最上部には四隅結界の意味を持つ水点が記され、1字目の梵字はボローンで、一字金輪・金輪仏頂などの種子。2字目はウーンで、愛染明王・降三世明王などの種子が記され、その下に疫病神牛頭天皇に用いられる符が記されている。3行1字目の梵字はマンで、文殊菩薩の種子。2字目はウーンで、明王部の種子になる。その下に符籙があり、「急・如律令」と定型句で結ばれている。

この呪符木簡の解釈としては、疫病神牛頭天皇が疱瘡等の疫病を流行らせているのを天形星の絶大なる威力で抑える避邪の呪符と考えられる。なお、疫病退散の祓いに用いた後は、溝に投棄して疫病を流し去るといった一連の行為が想定されよう。

3 木製品（図版12-2・3、14、15、第27・28図）

木製品には、漆器・履物・容器・板材等があり、1・2・9号溝下層から出土している。



第27図 木製品実測図① (1/3)

漆 器

椀 (1・2) 1は器高4.1cmで、口径は12.4cm、高台径は7.4cmに復原した。器壁は3mmと非常に薄く、洗練されている。内外面全体に黒漆を塗布し、赤漆で2本の竹と3~5葉の筆文を4ヶ所に描いている。2は残高4.0cmで、口径12.0cm、高台径6.4cmに復原した。底部は1.3cmと肉厚で、また高台幅も0.6cmと分厚い。高台付近の外面に黒漆の塗布が認められるが、大半が剥落しており文様を描いていたかは不明。1は2号溝Ⅲ区最下層、2は下層の出土で、もう1点漆椀の底部破片が出土している。

履 物

下駄 (3) 3は連齒下駄で、先端部から右側縁を欠くが台部は梢円形を呈しよう。後歯は尻部側に寄っている。緒孔は台部の側縁寄りに設けているが、鼻緒孔が右寄りであることから左足用とみられる。残存長20.0cm、最大幅8.2cmで、後歯の厚さ2.7cm、高さ4.1cmを測る。1号溝Ⅱ区下層の出土で、他に1号溝2区下層からも差込式の下駄の歯が出土している。

工 具

鎗 (4) 4は葉切り包丁形をなし、頭部は刃部状に薄くしている。長さ17.5cm、頭部幅3.4cm、柄先端幅1.1cmを測る。なお、下方に5cm間隔で小孔を2個穿っているが、直接的には関係がない孔とみられ、板材の転用品であろう。1号溝Ⅰ区下層から出土した。

容 器

折敷 (1~3) 1は折敷の底板と縁で、底板長は24.8cm、縁の高さ1.7cm、底板の厚さ0.6cm。縁には4ヶ所の目釘孔を設け、底板と接合している。2は縁部で、長さ28.9cm、幅2.3cm、厚さ0.7cmを測る。下部には17ヶ所と無数の目釘孔を設ける。3は板材の破片であり、隅切りしていることから折敷底板としたが、側縁に目釘孔はみられない。長さ18.6cmを測る。1は1号溝Ⅲ区下層、2は9号溝Ⅲ区下層の出土。

曲物 (4・5) 4は隅を丸くカットした底板で、側縁2ヶ所に目釘孔がみられる。残存長17.5cm、厚さ1.1cmを測る。曲物の底板になろう。欠損部分は燃えて炭化している。5は円形の板材で、残存長13.4cm、厚さ0.4cmを測る。側縁には目釘孔はみられないが、一応曲物の底板としておく。

桶 (6~8) 6~8は桶の底板で、6は残存長21.6cm、幅6.2cm、厚さ1.0cmを測る。側縁に4ヶ所、内側に3ヶ所の目釘孔がある。上面の孔は虫食いによるものと思われる。径26cm程に復原でき、底板は4枚程になろう。1号溝Ⅱ区下層の出土。7は残存長15.0cm、残存幅3.5cm、厚さ1.0cmを測り、復原すると径22cm程になる。側縁に目釘孔はみられない。8は残存長18.5cm、幅2.8cm、厚さ0.8cmを測り、両側縁に2ヶ所の目釘孔がある。1号溝Ⅰ区下層の出土。

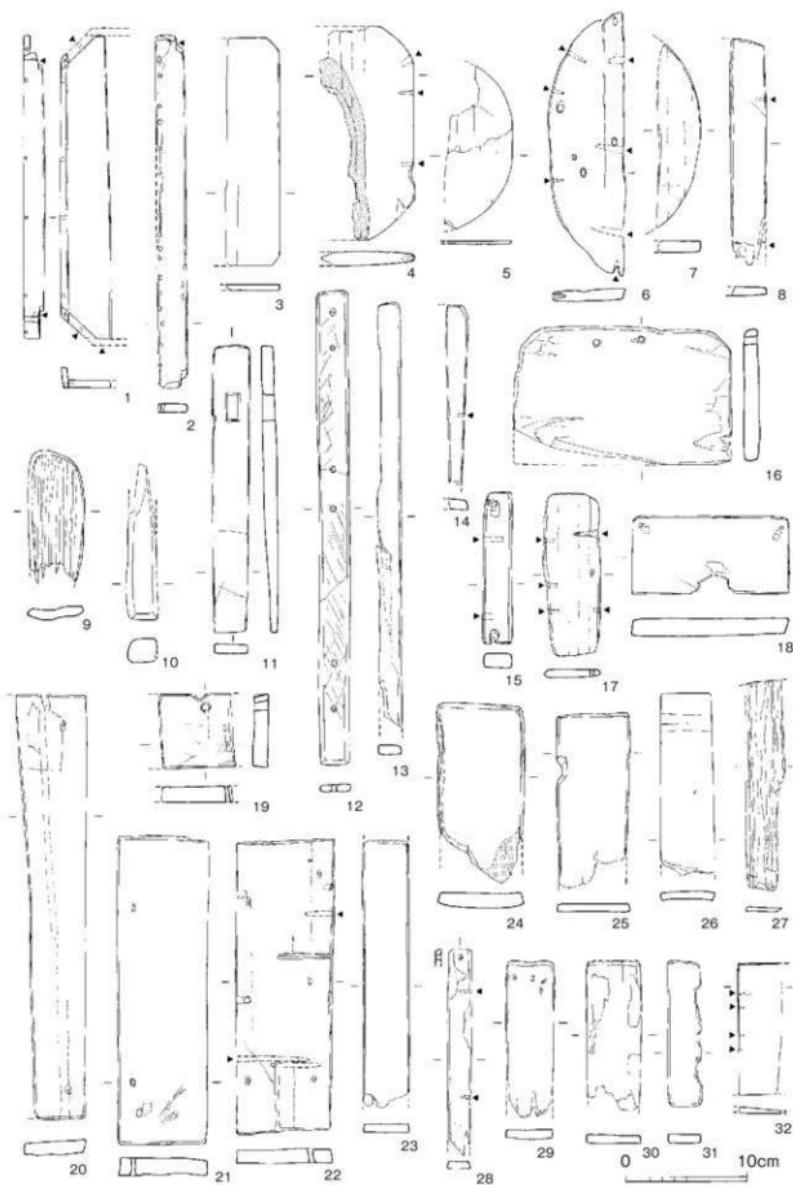
調理具

杓子 (9) 9は先端部分の破片で、残存長10.9cm、幅4.7cm、厚さ0.8cmを測る。扁平で片方が丸みを帯びる。杓子になるか。1号溝Ⅱ区下層の出土。

部 材

柄 (10) 10は柄の先端部破片で、残存長12.8cm、幅2.6cm、厚さ2.0cmを測る。断面は蒲鉾形をなし、上面に平坦面を有する。何かの柄になろう。1号溝Ⅰ区下層の出土。

棒状品 (11~15) 11は長さ23.5cmの棒状品で、上部幅3.1cm、厚さ1.1cm、下部幅2.5cm、厚さ0.5cmと幅・厚さとともに下側が細くなっている。頭部には先端から3.9cmの位置で長さ2.2cm・幅1.3cmの長方形の穴を空けている。用途は不明。12は長さ38.8cm、幅2.6cm、厚さ0.7cmの棒状品。3ヶ所に2孔一



第28図 本製品実測図② (1/4)

対の円孔を穿つ。13は残存長34.8cm、幅1.9cm、厚さ0.8cmのもので、2ヶ所を抉っており、中央部が山形をなす。目釘孔はみられない。14は残存長14.7cmを測る棒状品で、上部のみ生きている。15は長さ12.5cm、幅2.4cm、厚さ1.2cmのもので、上面及び側面に2ヶ所ずつ目釘孔を空けるが、側縁の目釘孔は斜め方向に穿っている。12・13は9号溝Ⅲ区下層出土。

板材（16～32） 16は長さ17.8cm、厚さ1.3cmの板材で、上端2ヶ所を隅切りする。中央上端に3.0cm間隔で2孔を穿つ。懸垂用の孔であろう。側縁に目釘孔はみられない。2号溝下層出土。17は長さ13.3cmの板材で、中央に円孔を穿つ。側縁2～3ヶ所に目釘孔がみられる。18は長方形の板材で、長さ12.9cm、幅6.4cm、厚さ1.4cmを測る。上面の両端部に円孔を穿つ。また、下端中央を山形に抉っているが、何を意図するものか不明。19は現状で方形を呈するが、両側縁側を欠損する。幅6.1cm、厚さ1.3cmのもの。上面中央と右下側に円孔を穿つ。18・19は1号溝Ⅱ区下層の出土。

20は長さ34.8cm、厚さ1.1cmの板材で、左側を欠く。上・下端から2.3cmの位置に円孔を穿っている。21は長さ25.2cm、幅7.5cm、厚さ1.4cmの板材で、左側に13.5cm間隔で小孔を穿つ。側縁には目釘孔はみられない。22は上下を欠く。幅7.9cm、厚さ1.3cmの板材で、右上面に3孔、左上面に3孔を穿つ。また、両側縁にも2ヶ所の目釘孔がみられる。2号溝下層の出土。23は残長21.7cm、厚さ0.8cmの板材で、上下を欠く。側縁に目釘孔はみられない。24は残存長14.7cm、幅7.2cm、厚さ1.3cmを測る板材で、下側は焼けて炭化している。1号溝Ⅲ区下層の出土。25～27は1号溝Ⅱ区下層出土の板材破片。25は幅4.8cm、厚さ1.2cmのもの。26は幅4.5cm、厚さ0.7cmを測る。丸みを帯び、側縁を斜めにカットしており、下端には擦の痕跡がみられることから桶の側板とみられる。27は上部のみ生きており、他は欠損する。残存長17.3cmを測る。

28は細長い板材で、残存長16.8cm、幅1.9cm、厚さ0.7cmを測る。上部に円孔と右側縁に2ヶ所の目釘孔がみられる。9号溝Ⅲ区下層の出土。29は残存長12.8cm、幅3.9cm、厚さ0.8cmの薄い板材で、上端部4ヶ所に目釘孔を有し、右側には目釘が遺存していた。30は下半部を欠損する。幅4.5cm、厚さ0.8cmの板材で、1号溝Ⅱ区下層の出土。31は長さ11.9cm、幅2.7cm、厚さ0.7cmの板材で、右側縁を鍵形にカットしている。何を意図したものは不明。1号溝Ⅰ区下層から出土している。32は厚さ0.6cmの薄い板材で、上部以外は欠損する。長さ10.7cm、残存幅3.5cm。左側縁に4ヶ所の目釘穴。

大型容器

槽（図版15c・d） cは残存長27.0cm、最大幅27.0cmを測る。半裁した木を5cm程刎り込み舟形としたもので、裏面は丸くなっている。右側に幅13.5cmの平坦面を有する。dは残存長57.5cmを測る。c同様、半裁した木を11cm程刎り込み舟形としている。側縁に径6cmの取手を設けている。規模からしてc・dとも馬糞槽になるか。cは1号溝Ⅱ区下層、dは2号溝Ⅲ区下層の出土。

建築部材

焼けた柱（図版15e・f） 1号溝Ⅱ区下層からは焼けた柱が2本出土している。eは長さ37cm、径10cmで、fは長さ35cm、径8cmを測る。

その他

盤（図版15a） aは残存長36.6cm、残存幅6.6cm、厚さ13.2cmを測るもので、側縁を丸くカットしている。上面は平坦で、裏面は丸みを帯びる。大型の盤になろう。2次調査の2号溝出土。

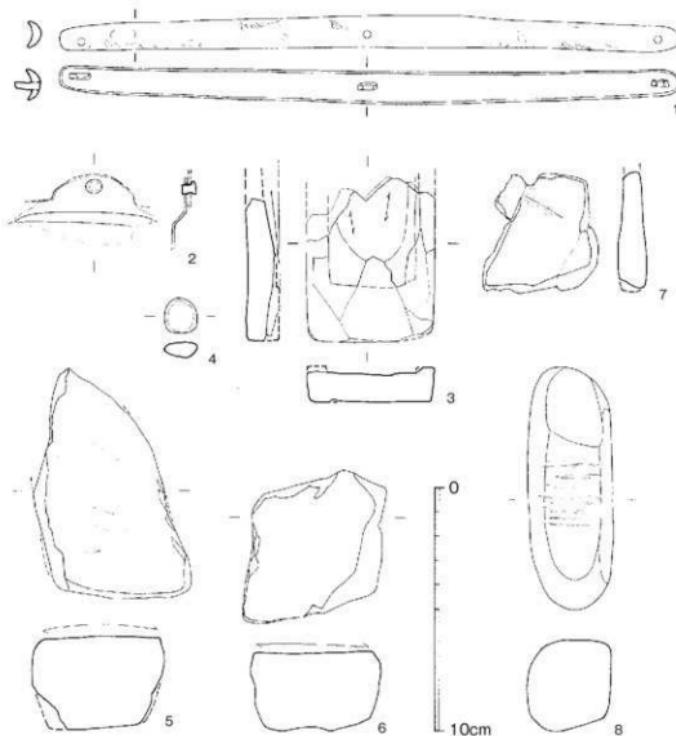
権形（図版15b） bは長さ34.3cm、肩部幅7.2cm、厚さ3.2cmを測る。上部が柄状に細くなっており、肩部を持つ権形をなす。9号溝Ⅲ区下層の出土。

4 金属製品（図版16-1、第29図）

金属製品は2号溝から2点出土したのみで、遺跡の立地が低湿地と言ふこともあり、鉄製品は腐朽してしまった可能性がある。

飾金具 (1) 1は棒状の製品で、長さ25.4cm、幅1.5cmを測る。断面は半円形をなし、裏面の両端部と中央に他の部材と接合するための突起を持つ。上面には鱗状の文様がみられるが、表面が剥落しているため定かではないが、龍などを彫りしたものか。材質はエネルギー分散型蛍光X線分析装置によると銅製品と判明した。

容器 (2) 2は鉢の破片で、頭部は緩やかな山形をなす。上部に銀があり、取手を結束したものとみられる。直線的であることから、容器の鉢だとすると容器自体は方形のものになろう。材質はエネルギー分散型蛍光X線分析によると純度の高い銅製品と判明した。



第29図 金属・石製品実測図 (1/2)

5 石製品（図版16-2、第29・30図）

硯

石硯（3）長方形を呈する石硯の陸端部破片で、残存長6.7cm、幅5.3cm、高さ1.4cmを測る。海側は厚さ0.7cmと薄くなっている。灰色を呈する粘板岩製。1号溝Ⅳ区最上層から出土した。

砥石

砥石（5～7）5～7は仕上げ砥石。5は上部のみ生きているが、他は欠損する。残存長9.4cm、厚さ4.8cmを測る。上面には擦痕がみられる。6は5.5×5.5cm大の破片で、上面のみ生きている。全周が火熱により黒く焼けている。7は厚さ1.2cmと扁平なもので、上下面以外は欠損する。何れも灰白色を呈するアブライト。5・6が2号溝Ⅲ区上層、7は8号溝Ⅱ区西半部の出土。

摺石（8）8は棒状品で、全体を摺っている。長さ10.0cm、幅3.5cm、厚さ3.7cm、重さ216gを量る。上面には5条以上の条痕があり、砥石としても使用している。2号土坑上層の出土。

石臼

茶臼（1）茶臼の上臼破片で、径19.5cmに復原した。側面には引手穴があり、基部は菱形に突出している。2号溝Ⅰ区黒色土の出土。

挽臼（2）挽臼の下臼破片で、中央には心棒穴があり、復原径は30cmで、厚さ9.0cmを測る。上面には9本の溝を切っており、6分割したものか。2は1号溝Ⅲ区上層の出土。ともに硬質砂岩製。

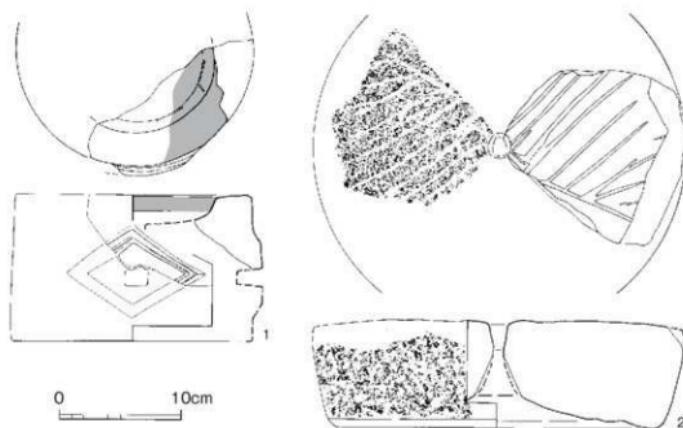
娛樂品

碁石（4）全面を研磨するが、重な不整円形をなし、長軸1.4cm、短軸1.3cm、厚さ0.6cm、重さ3gを量る。材質は白色を呈する石英で、3号溝北端の出土。

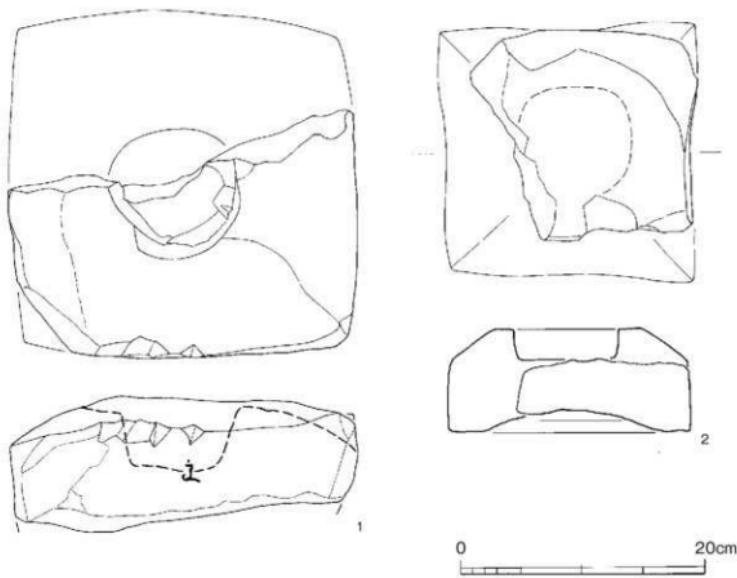
軽石 図示していないが、8号溝Ⅱ区西半部及び9号溝Ⅲ区上層から軽石が出土している。

五輪塔（図版16-3、第31図）

火輪（1・2）1は火輪の半欠品で、幅29cmを測る。高さは12cmと屋根の傾斜は緩やか。上面には空風輪を差し込む径9cmの枘穴を設ける。側面中央には墨で梵字が書かれ、ラン（金剛語菩薩）と判読した。凝灰岩製で、2号溝Ⅱ区上層の出土。2も火輪で、図示した正面のみ生きており、内湾している。残存長18.5cmで、屋根部を欠損するため厚さは5.5cm程度。内底面は水輪を受けるためか、若干窪んでいる。柔らかめの凝灰岩製で、1号溝Ⅲ区上層の出土。



第30図 石白実測図 (1/4)



第31図 五輪塔実測図 (1/4)



彼岸田遺跡その後（矢部川浄化センター）

V 彼岸田遺跡出土木製品の樹種同定

1) はじめに

彼岸田遺跡は福岡県筑後市島田字彼岸田に所在する室町時代と江戸時代後期の遺跡である。遺跡は花宗川中流域左岸の沖積低地に立地しており、二重の堀で囲まれた15世紀代の居館跡と30基以上からなる江戸時代後期の近世墓が確認されている。

出土遺物は、土師器・青磁碗・白磁皿・備前焼大甕・木製品・銅製品・石製品などがあり、これらの他に複数の木製品が出土している。本稿では木製品の樹種同定を行い、同定結果と用材傾向について報告する。

2) 資料

樹種同定の対象となる木製品は41点、その大半は溝跡（2号溝）から出土している。遺構の時期は室町時代（15世紀代）であり、遺物の時期も概ね一致すると考えられている。木製品の器種は、漆椀・下駄・臼・籠・櫛・馬糞・呪符木筒・部材など多岐にわたる。中でも、呪符木筒は福岡県内では出土例が少なく墨痕も鮮明な優品である。

3) 同定方法

木製品の樹種同定は以下の手順により行った。はじめに木製品の形状や木取りを観察し加工面や加工痕を避け、破断面などできるだけ木製品の形状を損なわない箇所から、木口・柾目・板目面の切片をカミソリで採取した。

採取した切片はプレパラートに載せ、その上からガムクロラールを滴下しカバーガラスを被せて標本プレパラートを作製した。標本プレパラートのガムクロラールが固化した後、生物顕微鏡（Nikon ECLIPSE E200）及びデジタルマイクロスコープ（KEYENE VHX-5000）で観察し、各切片の組織構造を原生標本や参考資料と比較して樹種を同定した。

4) 結果

樹種同定の結果、木製品41点の中から針葉樹4分類群、広葉樹1分類群が検出された。内訳は、針葉樹がスギ・ヒノキ・カヤなど32点、広葉樹がブナ属2点である。この他、樹種の絞込みができず針葉樹とした資料が4点、同定不可とした資料が7点ある。木製品の実測図は本文中の第27・28図に示し、本稿では出土遺構・器種・樹種・遺物の時期などの一覧について表1に示す。

彼岸田遺跡の木製品の中で最も多く検出された樹種はスギ（22点）で、次いでヒノキ及びヒノキ科（各2点）となる。木製品の大半が薄い板状であったため、加工の際に割裂に優れたスギやヒノキが多く利用されたと考えられる。いずれの樹種も北部九州地域に植生に合致した針葉樹材であり、九州島外からの持ち込みを示唆するものではなく、むしろ地産地消の結果を示すものと考えられる結果といえる。

*本稿では樹種鑑定上の解剖学的記載や各断面の顕微鏡写真について紙面の関係上掲載することができなかった。不備について記してお詫びする。

表1 彼岸田遺跡出土木製品 樹種同定結果一覧表

挿図	図版番号	出土遺構	種類	器種	樹種	遺物の時期	備考
26		2号溝	木製品	呪符木簡	スギ	15世紀代	
27-1		2号溝	木製品	漆器椀	-	15世紀代	
27-2		2号溝	木製品	タ	ブナ属	15世紀代	
27-3		1号溝	木製品	連齒下駄	スギ	15世紀代	
27-4		1号溝	木製品	籠	針葉樹	15世紀代	
28-1		1号溝	木製品	折敷	スギ	15世紀代	
28-2		9号溝	木製品	タ	スギ	15世紀代	
28-3		2号溝	木製品	タ	スギ	15世紀代	
28-4		2号溝	木製品	曲物	スギ	15世紀代	
28-5		2号溝	木製品	曲物	スギ	15世紀代	
28-6		1号溝	木製品	桶	-	15世紀代	同定不可
28-7		2号溝	木製品	タ	ヒノキ科	15世紀代	
28-8		1号溝	木製品	タ	スギ	15世紀代	
28-9		1号溝	木製品	杓子	-	15世紀代	同定不可
28-10		1号溝	木製品	柄	針葉樹	15世紀代	
28-11		2号溝	木製品	棒状品	針葉樹	15世紀代	
28-12		9号溝	木製品	タ	ヒノキ	15世紀代	
28-13		9号溝	木製品	タ	ヒノキ	15世紀代	
28-14		2号溝	木製品	タ	スギ	15世紀代	
28-15		2号溝	木製品	タ	スギ	15世紀代	
28-16		2号溝	木製品	板材	スギ	15世紀代	
28-17		2号溝	木製品	タ	スギ	15世紀代	
28-18		1号溝	木製品	タ	-	15世紀代	同定不可
28-19		12号溝	木製品	タ	-	15世紀代	同定不可
28-20		2号溝	木製品	タ	スギ	15世紀代	
28-21		2号溝	木製品	タ	スギ	15世紀代	
28-22		2号溝	木製品	タ	スギ	15世紀代	
28-23		2号溝	木製品	タ	スギ	15世紀代	
28-24		1号溝	木製品	タ	ヒノキ科	15世紀代	
28-25		1号溝	木製品	タ	針葉樹	15世紀代	
28-26		1号溝	木製品	タ	-	15世紀代	同定不可
28-27		1号溝	木製品	タ	-	15世紀代	同定不可
28-28		9号溝	木製品	タ	スギ	15世紀代	
28-29		2号溝	木製品	タ	スギ	15世紀代	
28-30		1号溝	木製品	タ	-	15世紀代	同定不可
28-31		1号溝	木製品	タ	スギ	15世紀代	
28-32		2号溝	木製品	タ	スギ	15世紀代	

※28-6・9・18・19・26・27・30は木製品が乾燥・収縮しており同定不可とした。

VI 総 括

1 検出遺構

彼岸田遺跡の調査区西半部で検出した遺構としては、掘立建柱建物2棟・溝10条・土坑2基・埋甕1基があり、15世紀代を主体として構築されている。また、江戸時代後期の近世墓が34基ある。

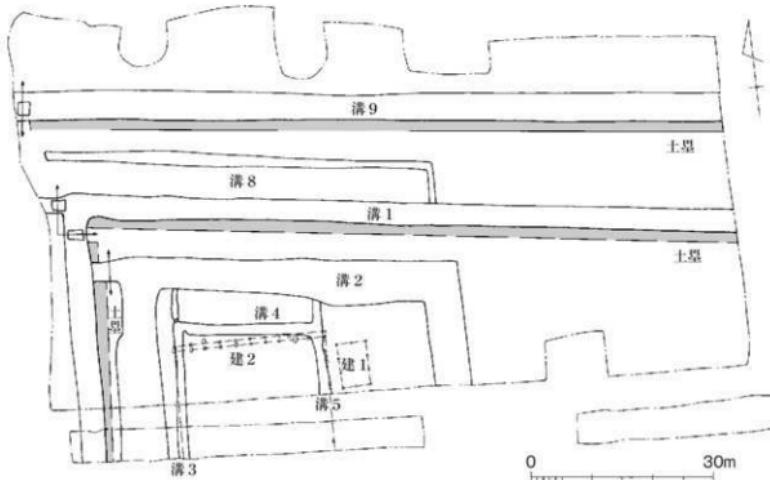
(掘立柱建物)

1号建物は2間(4.82m)×3間(7.4m)の側柱建物で、一般的な家屋建物であるが、2号建物は東西10間(24.6m)×7間(17m)以上の規模であることから、家屋建物ではなく何らかの区画施設になると考えられる。

(溝)

溝には幅4~8mの大溝(1・2・6・9号)と幅1.5m前後の小溝(3~5・7・8号)の二者があり、取分け1・9号溝は長さ120m以上の大規模なものであり、遺跡全体を囲む外郭施設と考えられる。2号溝は東西長65mで、溝の内側には建物・土坑・埋甕が存在することから内部施設を囲む溝とみられる。3~5号溝はH形をなす一連の区画溝で、区画施設とした2号建物の後継施設となろう。1・2・9号溝は通路となる陸橋を溝の西側に有している。なお、2号溝Ⅲ区からは漆椀・馬鍔・唐銅・馬糧槽等が溝底に密着した状態で出土していることから、通常は水が殆ど貯まっておらず、泥濘の状態-空堀であったことを示している。

また、1・2・9号溝の埋土上層には、下層の堆積土(黒灰色土)と異なる黄色土が含まれており、この黄色土を土壌由来の堆積土とみると溝の肩部内側に土壌を想定することができる。なお、筑後市野屋敷遺跡では、土壌とその前後に掘削された堀が確認されている。



第32図 彼岸田遺跡防護施設模式図(1/800)

(土 坑)

1号土坑は長方形を呈し、長さ8.4m、幅1.64mと大規模なもの。2号土坑は梢円形を呈し、長軸3.5m、深さ1.4mを測る。南側のテラスは階段状をなし、素掘りの井戸とみられる。

(埋 壽)

1号埋壺は備前焼大甕を斜めに埋置した遺構で、甕の下からは土師器皿・坏が出土しており、地鎮等の祭祀行為或いは墓の可能性を有する。

2 出土遺物

出土遺物には、土師器皿・坏類を主体とし、陶磁器類（青磁碗・白磁皿・備前焼大甕）、漆製品（椀）、木製品（下駄・折敷・曲物・杓子・部材・槽等）、銅製品（容器・毛彫り模様を施した棒状品）、石製品（石硯・茶臼・碁石・五輪塔）があり、陶磁器類・硯・茶臼・漆椀などの存在は、本跡の住人が一般民衆ではなく、かなりの経済力を有した富豪層であることを物語っている。

(土師器)

土師器皿・坏の底部切り離しは、何れも糸切り離しによる。分類に関しては、法量・形態から小皿・皿・坏に大別し、形態の差異により a・b に細分した。また、口径÷底径×高さを形態比率として示した。

小皿 a：口径5～7cm前後、底径4～6cm程、器高1.5cm程のもので、形態比率は1.4～2.7。

小皿 b：器高2.5cm前後と小皿 a より深めのもので、形態比率は2.7～3.4。

皿 a：口径9cm前後、器高2cm前後のもので、形態比率は3.0前後。

皿 b：口径12cm前後、器高2.5cm程のもので、形態比率は3.5～4.5。

坏 a：口径12～13cm、底径6～7cmのもので、形態比率は5.0～7.8。

坏 b：直線的に開き、作りがシャープなもので、形態比率は7.0前後。

表2 皿・坏法量表

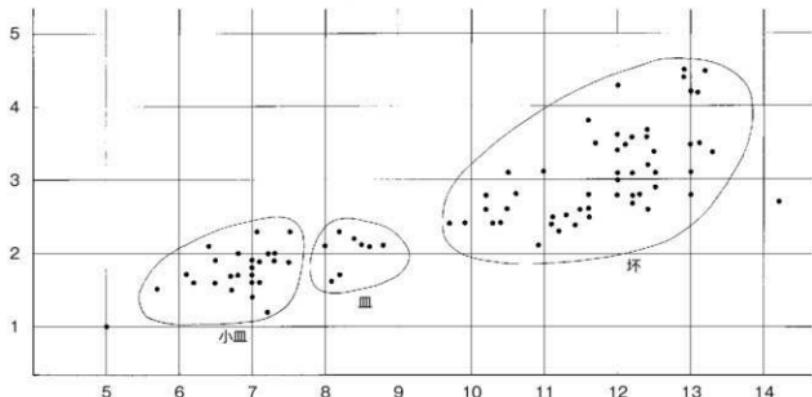


表2では、小皿 a は器高1.5cm前後、口径7cm前後に集中し、皿 b は器高2.5cm前後、口径11cm前後に集中する傾向にある。口径・器高の推移表によると15世紀の様相を示す。

3 呪符木簡について

天形星木簡は、2号溝II区東肩部上層から出土した。長さ28.2cm、幅9.3cmの短冊形をなし、頭部を圭頭形に削っている。墨書は表面に1行、裏面に3行あるが、墨は裏面の下端部を除き殆ど遺存していなかったが、墨書の痕跡がレリーフ状に浮き上がっており、以下の如く判読した。

なお、呪符木簡の解釈については、彼岸田遺跡の呪符木簡が発見された折、奈良大学教授水野正好先生及び千手寺木下密運氏の御教示によるものである。

・「  天形星王八王」	表面：1字目の梵字（パン）は、大日如來の種子
・「  天罡（符錄）九、八十一	裏面：1行1字目の梵字（ジク）は、般若菩薩等の種子
二七九八	2字目の梵字（ア）は、文殊菩薩の種子か
 (符錄) 一申	2行1字目の梵字（ボローン）は一字金輪等の種子
 (符錄) 急、如律令	2字目の梵字（ウーン）は愛染明王等の種子
	3行1字目の梵字（マン）は文殊菩薩の種子
	2字目の梵字（ウーン）は明王部の種子

「天刑星」に関する木簡は、奈良文化財研究所木簡データベースによると2点掲載され、和歌山県和歌山市西庄II遺跡と富山県井口村蛇喰A遺跡がある。「天刑星」と記した呪符木簡は当遺跡を含めて9点掲載されており、広島県福山市草戸千軒町遺跡（3点）、静岡県焼津市小川城遺跡（4点）、新潟県加治川村砂山中道下遺跡、島根県出雲市築山遺跡がある。

『日本の絵巻7』によると、天刑（形は刑の誤写）星は歳星（木星）のこと、奈良時代に天文・曆学が導入されて以降知られるようになった。やがて仏教と結び付き、天刑星は大威德明王と同一視され、牛頭天王とも同体と考えられるに至ったとされる。^(注1)『地獄草紙』益田家本乙巻には、天刑星が牛頭天王及びその眷属の疫鬼を酢に漬けて噴らう様が描かれている。また、『薦墓内伝』によると八王とは牛頭天王の八王子一八将神とされる。

「天罡」とは北極星のこと、木下密運氏によると、道教では天罡大型として大変尊崇されており、「天罡」の文字が記された静岡県伊場遺跡出土の木簡は、北極星を祭って百恵の悪鬼を退け、疫病・災難を除くことを祈ったものと考えられるとされている。^(注2)また、同氏によると掛算の「九々八十一二七九八（八九七十二の逆字）」は、道教の九宮八十一神と八卦七十二星神をもって陰陽順逆相生相剋の理を表している反魂の符とされており、八九七十二は陰の極数で、九九八十一は陽の極数であることから陰（病）を抑え、陽（恢復）に向かわせるための句とされる。

このことから、彼岸田遺跡呪符木簡の解釈としては、疫病神牛頭天王が疱瘡などの流行病を流行らせているのを、天形星の絶大なる威力でもって抑える避邪の呪符と考えられる。また、蛇喰A遺跡例は井戸からの出土で、草戸千軒町遺跡例は井戸・溝から、小川城遺跡出土例は堀からと言った水に関連する遺構からの出土であり、疫病退散の祓いに使用した後は溝・水に投棄して疫病を流し去るといった一連の行為が想定されよう。

4 彼岸田遺跡の成立について

(1) 遺跡の時期

彼岸田遺跡の溝・土坑・埋甕等からは、土師器皿・壺類・陶磁器類（青磁碗・白磁皿・備前焼大甕）が出土している。土師器皿・壺の形体・法量は、文亀元年（1501）銘の木簡と供伴した觀世音寺S D 1805出土土器と類似する。また、青磁碗の蓮弁は文様の退化がみられる。備前焼大甕は寸胴で、頸部が短く立ち上がり、肥厚する口縁部に至るもので、14世紀中頃の特徴をみせる。これらのことから、彼岸田遺跡は14世紀中頃～15世紀代の存続と考えられる。

(2) 遺跡の構造

本跡の溝の配置状況から窺えることは、先ず1・2・8・9号溝が約5mの等間隔をもって掘削されていること。次に2号溝で区画された内側に建物・土坑・埋甕などの施設が存在し、7号溝の内側には整地層がある。その二つのエリアを1号溝で囲み、さらに全体を9号溝で囲んでいる点に大きな特徴がある。^[14] 中世末とされる筑後市熊野屋敷遺跡では、土塁の内外に溝（堀）を掘削しており、本跡においても溝間に土塁が想定できる。その際、1・9号溝の西端部には陸橋を設け、通路として機能させている。また、8号溝の西端部が1・9号溝の陸橋部付近で終わっているのは、そのことを裏付けるものである。

これらを勘案すると、彼岸田遺跡は性格の異なる二つの空間を1号溝（内堀）と9号溝（外堀）の2重の溝で厳重に防御した施設と言える。また、9号溝は東西長が114mを測り、北・東・西側には現クリークが方形に閉続し、区画を踏襲したと仮定すると遺跡全体の規模としては一町半（150m）の豪族居館跡と推測される。しかし、今回の調査は、遺跡の北縁を確認したにすぎず、遺跡の主体は調査区外の南側に展開するものとみられる。

(3) 彼岸田遺跡の成立

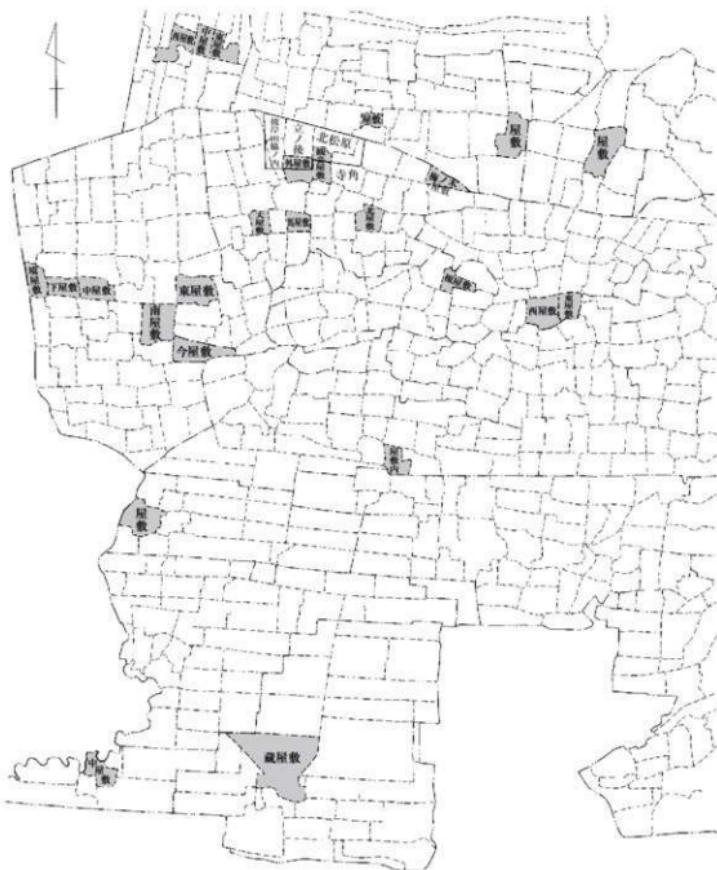
彼岸田遺跡の性格に関しては、遺構・遺物内容から15世紀代を主体とする豪族居館であることを述べた。次に遺跡の成立過程について触れておこう。以下、『筑後市史』を参考とした。

鎌倉時代初期、南筑後地域には八女市城上妻荘（800町）と弥勒寺領の川合荘（80町）が存在し、広川町から筑後市にかけては熊野神社領の広川荘（440町）が存在していた。一方、下妻郡には筑後市大字水田を中心に水田荘（200町）が、筑後市大字馬間田・下妻に下妻荘（55町）が存在し、ともに天満宮安楽寺領であった。また、瀬高町（現みやま市）大字本郷・文広には広田荘（400町）が存在していた。三瀧郡には東寺宝莊院領の三瀧荘（1,250町）が存在し、宝莊院の中核的所領であった。なお、山門郡には筑後随一大規模な荘園である徳大寺領の瀬高荘（2,160町）と横手荘（200町）が存在していた。

水田荘は天満宮安楽寺の荘園で、領家は京都の菅原（高辻）氏であるが、実質的に現地を莊官として支配していたのは菅原氏と同族の大鳥氏と小鳥氏であった。荘園の成立は13世紀前半頃とされ、南北朝初期には南鷲（本村）・北鷲・福鷲の三村合わせて200町程の面積であった。南北朝間に安楽寺留守大鳥居信高が水田荘に下向してからは安楽寺の中核所領となり、室町末期には600町程の面積まで拡大したとされている。

貞蓮和与状（天満宮文書）によると、「去正平廿四年四月五日^朔、始而於彼地〔 〕欲造立老松社之處、新熊野神人等出向彼所、致〔 〕已來」とあり、正平24年（1369）、大鳥居信高は広川莊との境界に老松社を建立しようとして熊野神社側の妨害にあい、両莊の境界相論へと発展する。

また、今川了俊書下（天満宮文書）によると、「天満宮大鳥居信榮法眼申、当宮領筑後國水田本村百姓石丸・鬼丸両輩、今犯用神要、結句自放火逐電間事、既尋究隱居住在所、如信榮訴申者、広川莊若菜村住人正覺入道加扶持、隱居妻子・資財云々」があり、至徳2年（1385）には、水田本村百姓石丸・鬼丸両人が、神要（太宰府天満宮の神事用に使う年貢）を横領したあげく逐電した。隠れ家を探した



第33図 彼岸田遺跡周辺小字図（1/300）

所、広川荘若菜村の正覚入道が妻子・資財とも匿っていたという事件が発生する。この様に、水田荘と広川荘は旧花宗川を挟んで時折、土地争い・衝突を繰り返していた。

なお、水田荘は南嶋（本村）・北嶋・福嶋の三村から成るが、水田天満宮が本村に建立されていることから、南嶋村は水田天満宮が鎮座する筑後市大字水田を中心とする地域が該当し、北嶋村は南嶋村の北に位置することから付けられた村名とみられ、水田天満宮北側の筑後市大字上北島・下北島を中心とする地域と考えられる。最後に福嶋村であるが、筑後市大字古島の東端には「榎屋敷」の小字があり、菅原資兼の「小榎屋敷」の遺称地と推測されている。また、暦応2年（1339）の北水田進信和与状には「福嶋村内下牟田」とあることから、福嶋村は筑後市大字古島・島田～大字井田・中牟田にかけての地域と考えられる。

さらに、「屋敷」地名を拾っていくと、水田天満宮の北西に「東屋敷」・「西屋敷」があり、大島居氏の居館跡とみられる。前述した大字古島には、菅原資兼の小榎屋敷の遺称地と推測される「榎屋敷」の小字がある。なお、大字島田には「梅ノ木屋敷」・「北屋敷」・「觀音屋敷」・「外屋敷」（彼岸田遺跡）・「馬屋敷」・「大屋敷」があり、大字井田には「東屋敷」・「南屋敷」・「中屋敷」・「下屋敷」・「境屋敷」・「今屋敷」・「古屋敷」の小字がある。これら全てが居館跡とは断言できないが、何れも一町半ないし二町程の規模を有し、大字島田の「北屋敷」・「觀音屋敷」・「外屋敷」及び大字井田の「東屋敷」・「中屋敷」・「下屋敷」・「境屋敷」・「古屋敷」はクリークで取り囲まれており、彼岸田遺跡の例からすると居館跡の可能性が極めて高いものと思われる。

最後に、彼岸田遺跡の性格・成立についてであるが、

- ①旧花宗川を挟んで広川荘と対峙する。
- ②全体として一方一町半の規模を有する。
- ③内部施設を二重の方形溝（堀）で囲み、防御的色彩が濃い。
- ④陶磁器類・漆器・茶臼・銅製品・硯・呪符木簡及び農工具等の特殊品を保有する。
- ⑤14世紀後半から15世紀代にかけて存続した。

以上のことから、室町時代に水田荘福嶋村の支配に関わった大島居氏関連氏族の居館跡と推定され、旧花宗川を挟んで対抗勢力である熊野神社領の広川荘と対峙することから、水田荘の前線基地的性格を色濃くみせる。しかし、唐銚・馬鍔・馬禡槽の出土を評価すると、緊張状態の中にありながらも日々農耕に勤しだ様子をも窺い知ることができよう。

註

- 1 小松茂美編集・解説 「日本の絵巻7」1987 中央公論社
- 2 八将神は大歲神・大將軍・大陰神・歲刑神・歲破神・歲殺神・黃旗神・豹尾神で、年々のえとによって規則的に十二方位を遊行し、その年に宿る神によって方角の吉凶が定められた。
- 3 木下密運 「歴史考古資料にみる道教の影響」歴史公論No66 1981 雄山閣出版
- 4 上村英士編 「熊野屋敷遺跡」（筑後市文化財調査報告書第101集）2012 筑後市教育委員会

参考文献

- 小田和利 「筑後市彼岸田遺跡出土の呪符木簡」「九州歴史資料館研究論集28」 2003
筑後市史編纂委員会 「筑後市史」上・下巻 1997

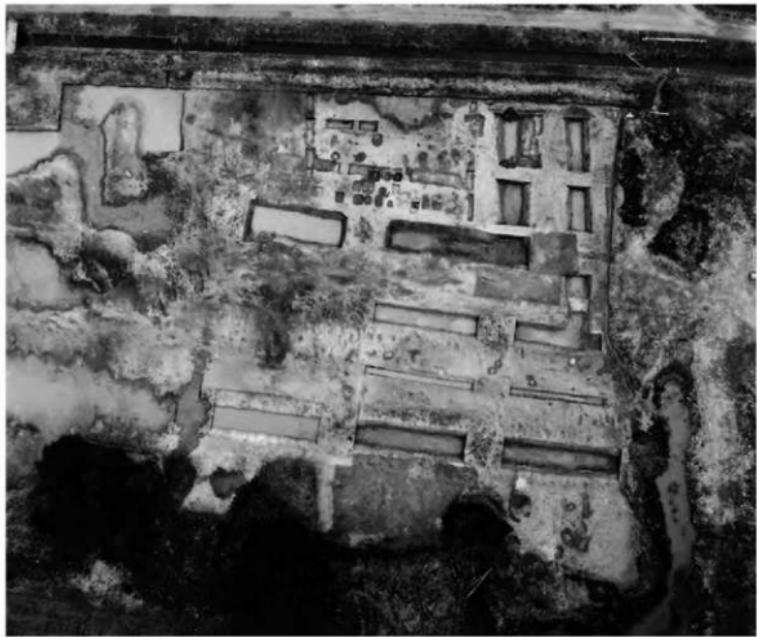
図 版



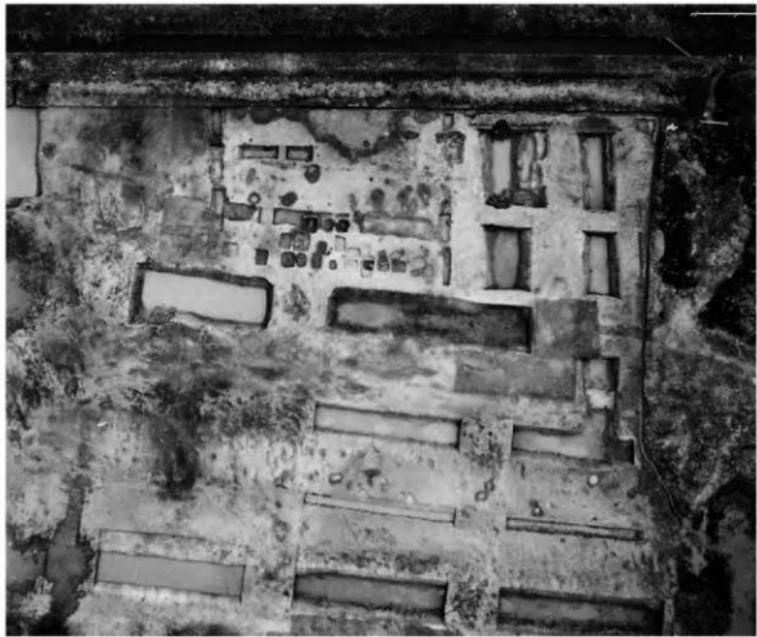
(1) 彼岸田遺跡全景（西上空から）



(2) 彼岸田遺跡全景（北上空から）



(1) 調査区全景（北上空から）



(2) 調査区全景（真上から）



(1)



(2)



(3)

(1) 1号溝Ⅰ区南端部（北から） (2) 1号溝Ⅱ区土層（南から） (3) 1号溝Ⅲ区土層（北から）



(1) 1号溝Ⅲ区（西から）



(2) 1号溝Ⅲ区陸橋部（北から）



(3) 1号溝Ⅲ区陸橋部（西から）



(1) 3号溝、2号土坑（南から）



(2) 2号溝Ⅲ区木製品出土状況



(3) 2号溝Ⅲ区漆器椀出土状況



(1) 8号溝Ⅰ区（東から）



(2) 8号溝Ⅱ区土器出土状況



(3) 9号溝Ⅲ区土層（西から）



(1) 8号溝Ⅱ区（西から）



(2) 8号溝Ⅱ区西端土層
(東から)



(3) 8号溝Ⅱ区東端土層
(西から)



(1) 1号土坑（西から）



(2) 1号埋甕（西から）



(3) 1号埋甕下部土器出土状況（南から）



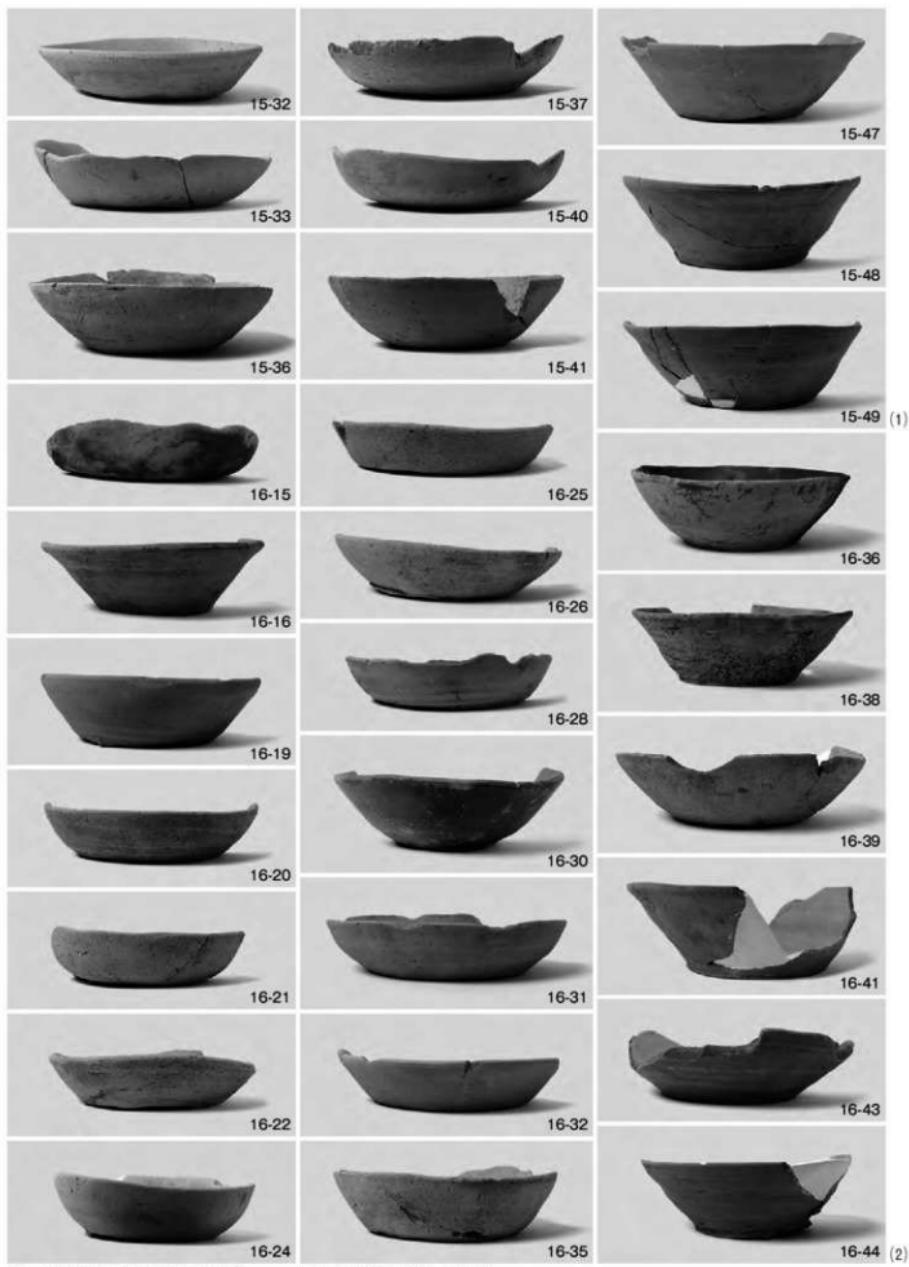
(1) 1号溝出土土器・陶磁器
(4) 2号溝Ⅱ区下層出土土器①

(2) 2号溝Ⅰ区出土土器・陶磁器

(3) 2号溝Ⅱ区出土土器・陶磁器

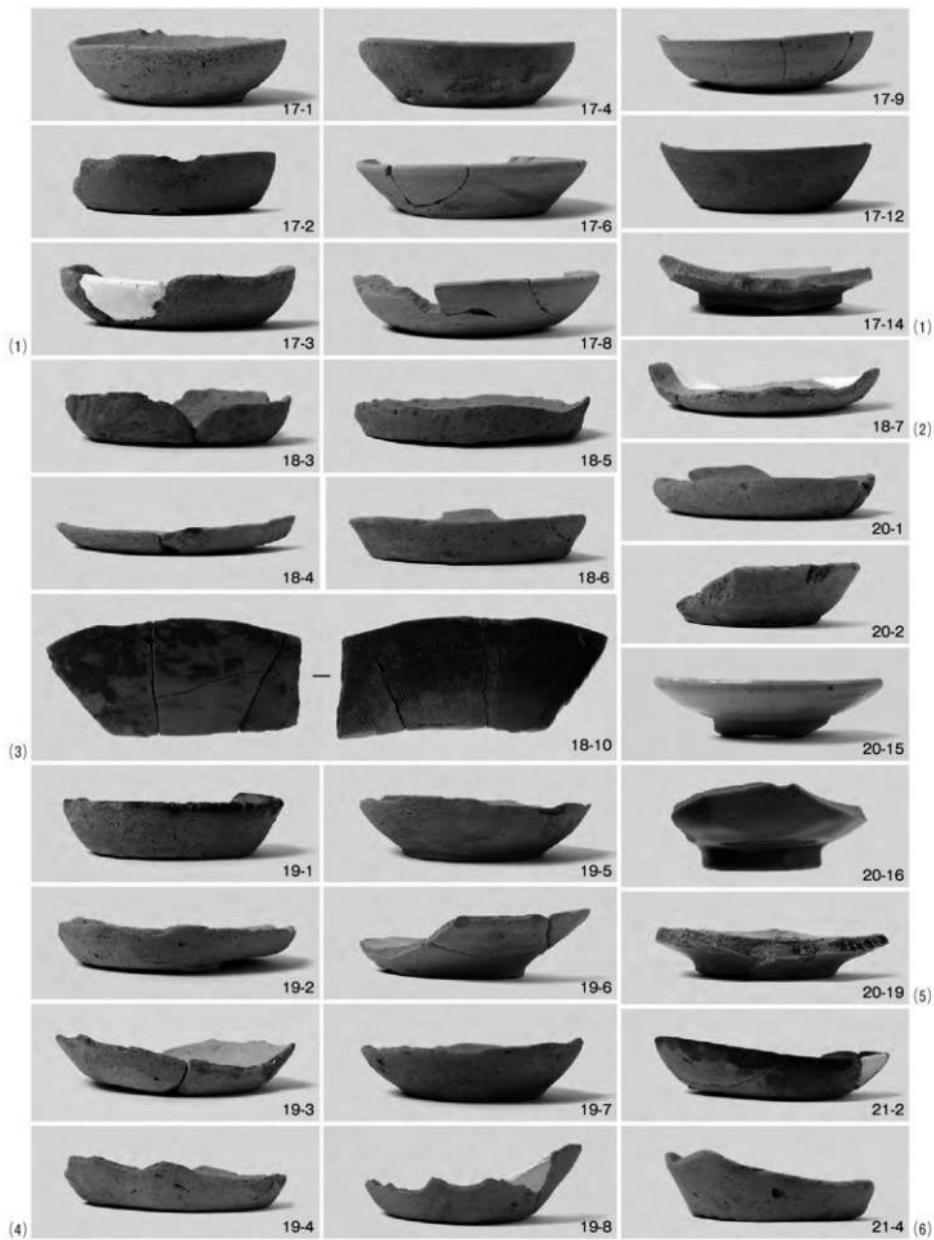
(4)

図版10

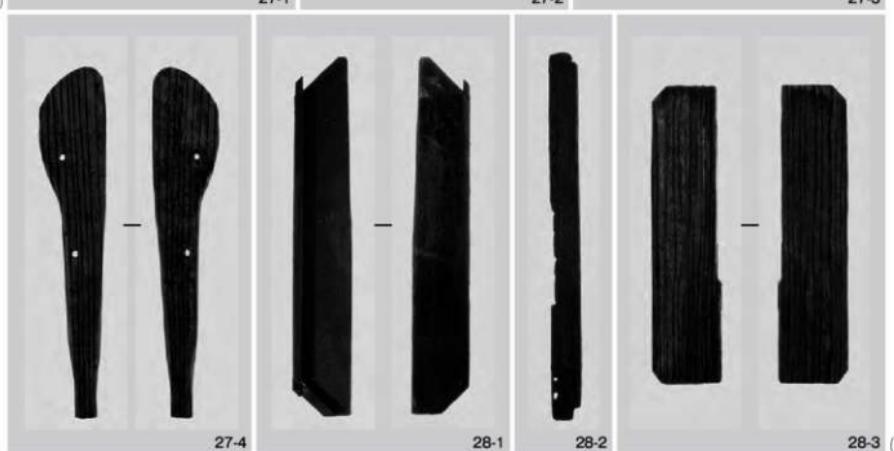
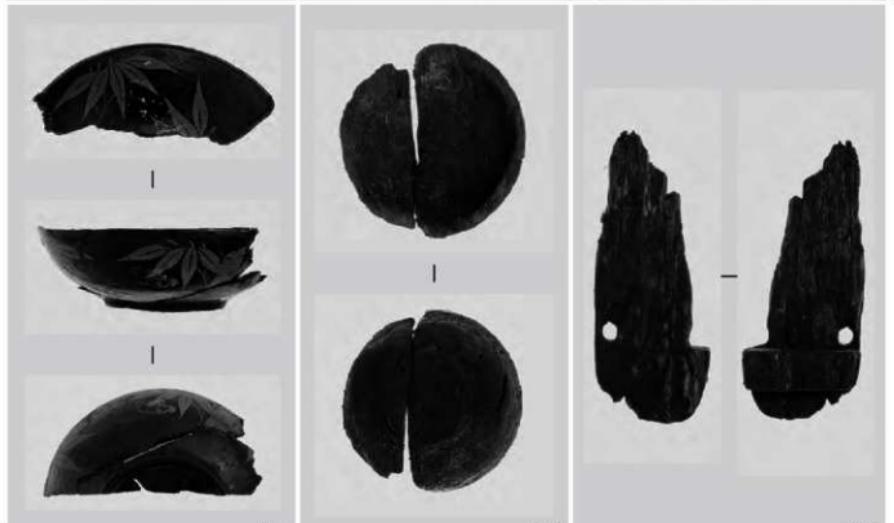


(1) 2号溝Ⅱ区下層出土土器

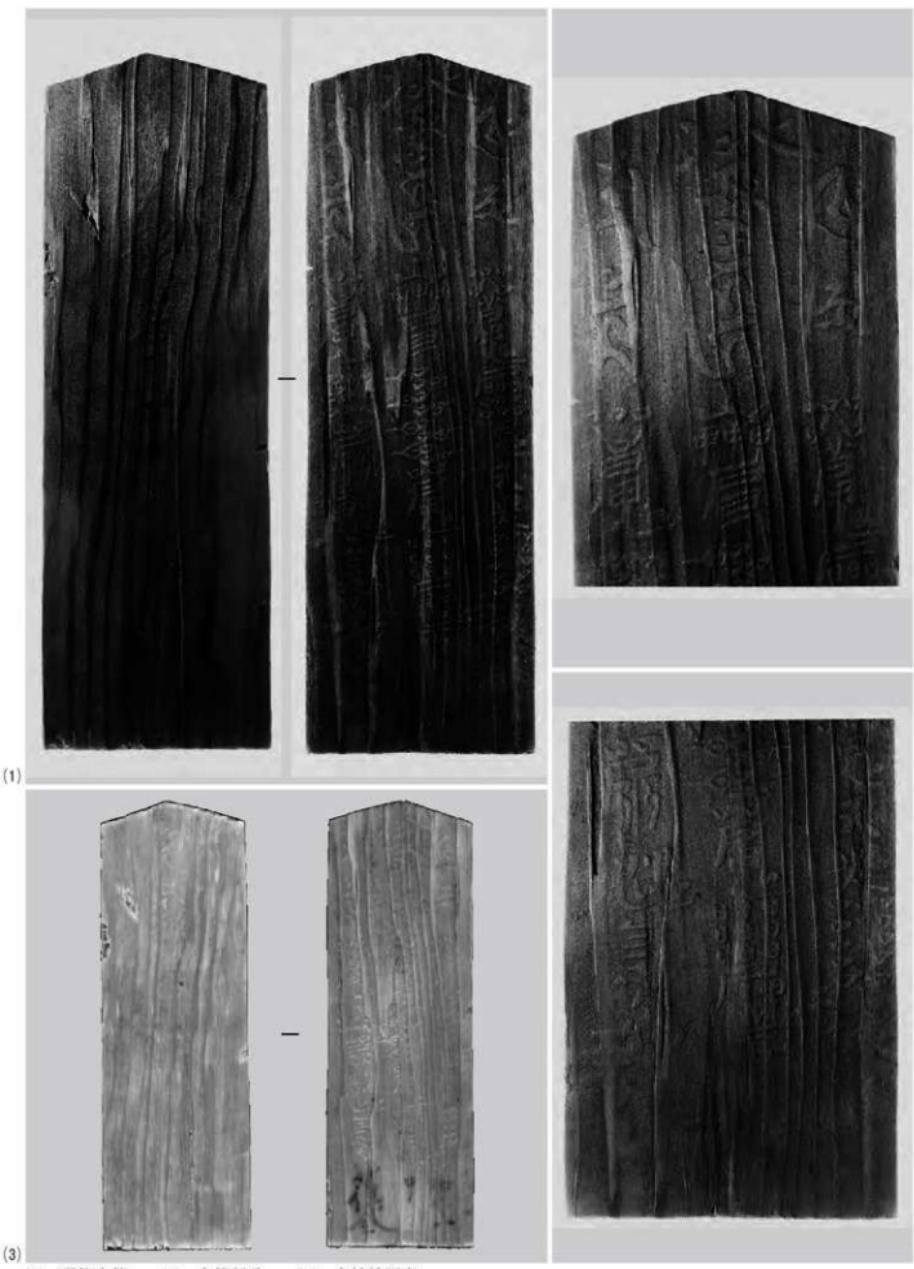
(2) 2号溝Ⅲ区出土土器



(1) 2号溝Ⅳ区出土土器・陶磁器 (2) 4号溝出土土器 (3) 5号溝出土土器
 (4) 8号溝出土土器 (5) 9号溝出土土器・陶磁器 (6) 2号土坑出土土器



(1) 1号埋甕下部出土土器 (2) 漆器椀 (3) 木製品①

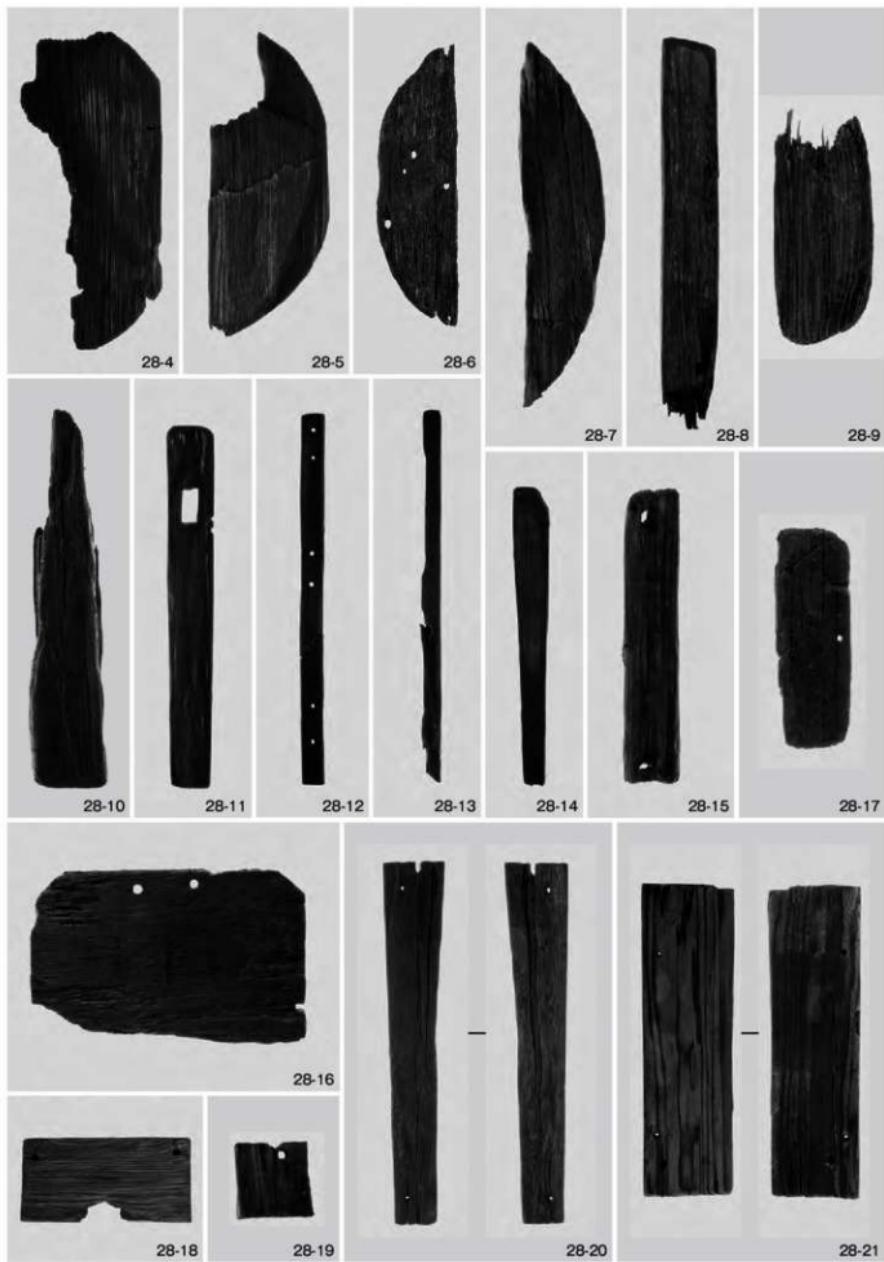


(3)

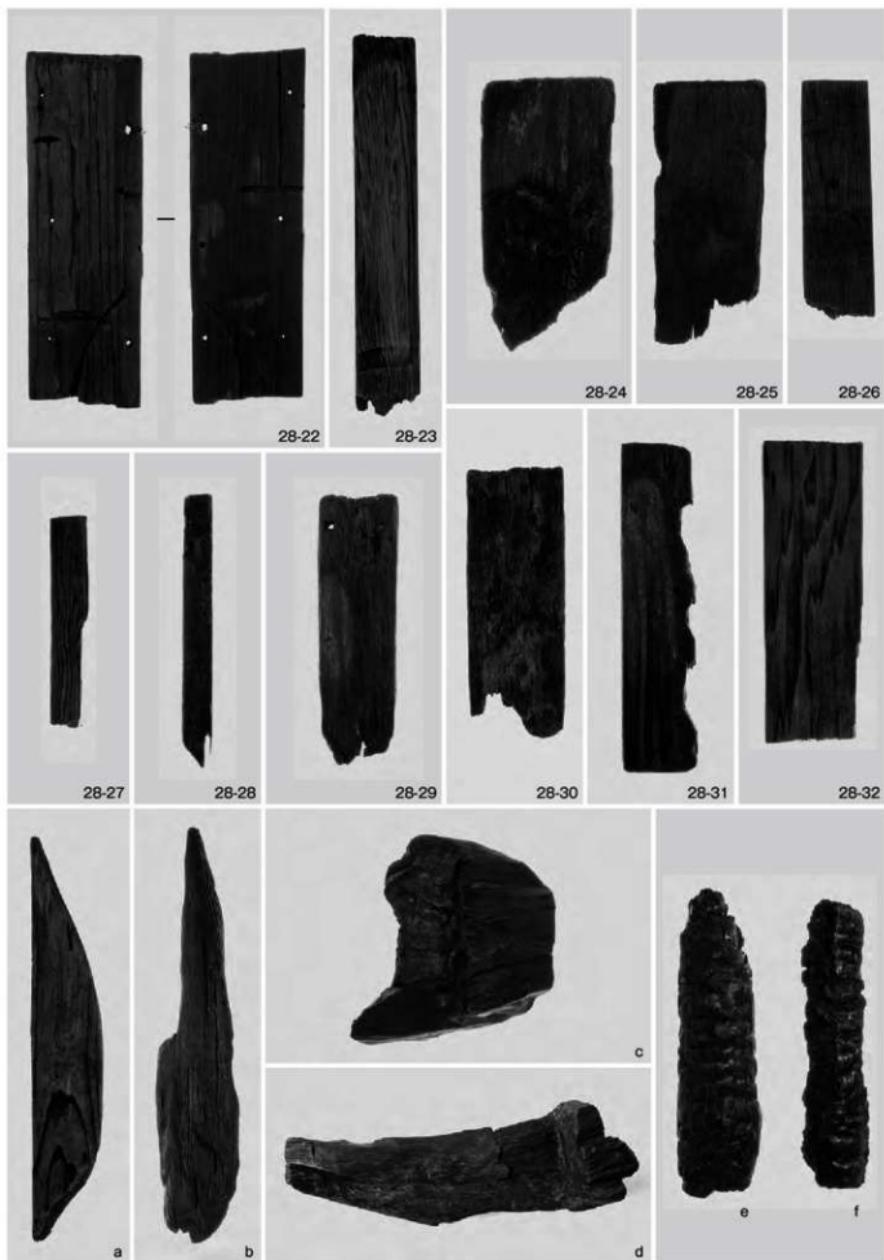
(1) 呪符木簡 (2) 本筒部分 (3) 赤外線写真

(2)

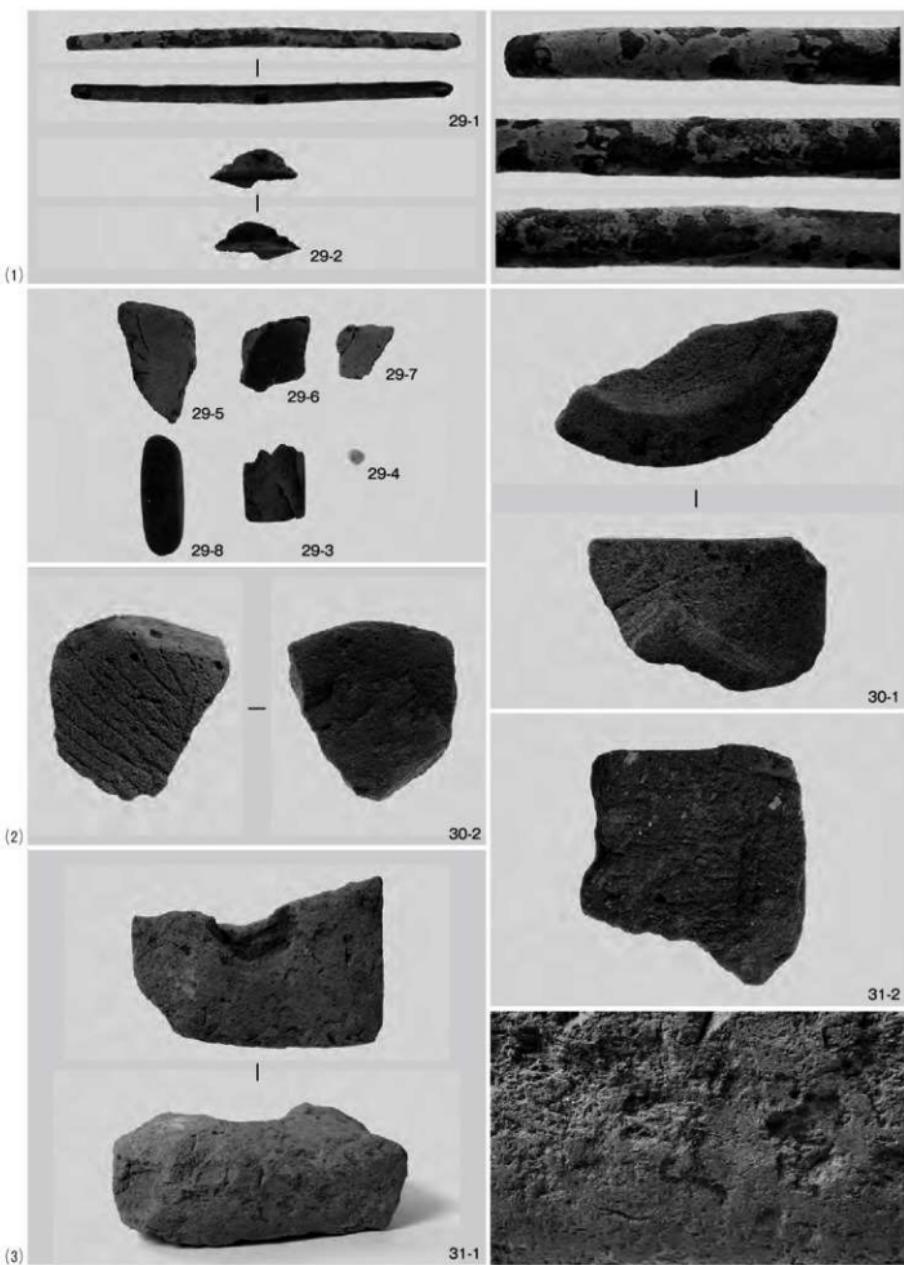
図版14



木製品②



木製品③



(1) 金製品 (2) 石製品 (3) 五輪塔

報告書抄録

ふりがな	ひがんだいせき I
書名	彼岸田遺跡 I
副書名	矢部川流域下水道事業関係埋蔵文化財調査報告
卷次	I
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第263集
編著者名	小田和利(編集)、小林啓、安木由美
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3 Tel. 0942-75-9575
発行年月日	2018年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ○○○	東経 ○○○	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがんだいせき 彼岸田遺跡	ふくおかせんちくごしおおあざ 福岡県筑後市大字 しまだあざひがんだ 島田字彼岸田532番地、 そとやしき 外屋敷703-1他	40-211		33° 12' 06"	130° 28' 15"	001002 ～ 010316	約7.700 m ²	下水処理 場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
彼岸田遺跡	居館跡	室町時代	掘立柱建物 溝 土坑 埋甕			土師器・陶磁器・ 木製品・金属器・ 石製品		内部施設を二重の溝 (堀)で囲んだ富裕 層の居館跡

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2117104
登録年度 29	登録番号 4

矢部川流域下水道事業関係埋蔵文化財調査報告 1

彼岸田遺跡 I

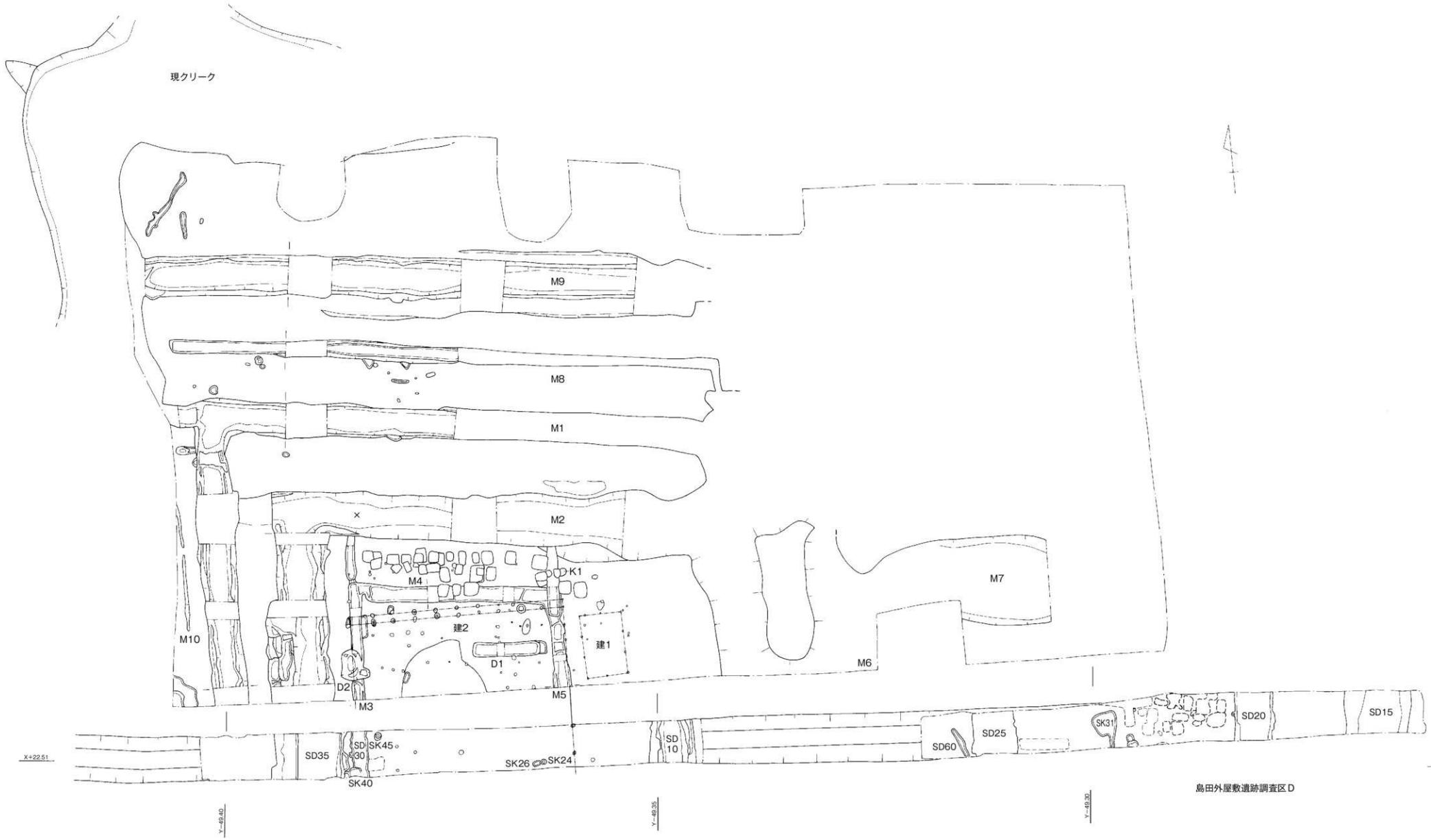
平成30年 3月31日

発行 九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208-3

印刷 大同印刷株式会社
佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20

彼岸田遺跡 I

付 図



付 図 彼岸田遺跡遺構配置図 (1/300)